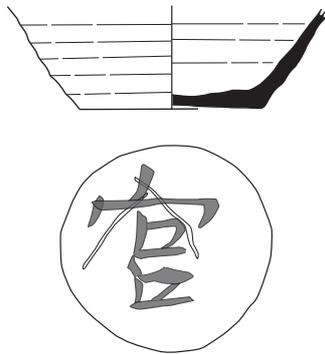


小原遺跡

(第3地点)

都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2015

水戸市教育委員会

こ はら い せき
小 原 遺 跡

(第3地点)

都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。私たちの祖先もこの豊かな環境のもと古くから生活を営んできました。

小原遺跡は、市街地の南東、旧常澄村域にあたる東前の台地上に位置し、この一帯には国指定史跡「大串貝塚」をはじめ、東前原遺跡、北屋敷古墳群、梶内遺跡、大串遺跡、椿山館など、縄文時代から中世に至るまでの多くの遺跡が分布しており、連綿とした人々の生活の営みを垣間見ることができます。

埋蔵文化財はその性格上、一度破壊されてしまうと二度と現状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へと着実に伝えていかなければならない貴重な歴史的文化遺産です。

東前町周辺では、近年の区画整理事業に伴い、都市化が進行し、周辺に位置する遺跡の様相も大きく様変わりしております。このような都市化と文化財保護の両立は、行政としても大きな課題として懸念されるところであります。本市においては埋蔵文化財の歴史的意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき、保護保存に努めているところです。

このたび計画された小原遺跡内における道路改良及び下水道工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、開発部局と事前に十分な協議を重ねてまいりましたが、今回の計画によって遺跡の現状保存は困難であるとの結論に至り、次善の策として記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、7世紀後半から9世紀後半に至るまでの竪穴建物跡や掘立柱建物跡が多数検出されるとともに、「宮」と墨書された土器が出土するなど、貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書をかけたがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、今回の調査の実施に際し、多大なる御理解と御協力を賜りました地域住民の皆様と関係各位に心から御礼と感謝を申し上げます。

平成 27 年 3 月

水戸市教育委員会教育長 本多 清峰

例 言

1. 本書は、茨城県水戸市東前町地内に所在する小原遺跡第3地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、水戸市教育委員会が実施した。

本多 清峰 水戸市教育委員会教育長

事務局

中里誠志郎 水戸市教育委員会事務局教育次長

飯村 博史 同文化課埋蔵文化財センター所長

米川 暢敬 同文化財主事

太田有里乃 同主事（調査担当者）

丸山優香里 同埋蔵文化財専門員

鈴木 学 同埋蔵文化財専門員

安達 司 同埋蔵文化財専門員

3. 水戸市から発掘調査業務委託を受けて有限会社毛野考古学研究所茨城支所は水戸市教育委員会の指示のもと発掘調査の支援業務を実施した。支援者は土生朗治・宮本久子である。
4. 調査期間は、平成27年1月26日～平成27年2月28日、整理期間は、平成27年3月1日～平成27年3月31日で、調査面積は621.25㎡である。
5. 調査・整理担当者、執筆分担は以下の通りである。

【発掘調査】 太田有里乃（水戸市教育委員会）、土生朗治（（有）毛野考古学研究所）

【整理作業】 太田有里乃、土生朗治・賀来孝代（（有）毛野考古学研究所）

【執筆分担】 I・II章：太田有里乃・染井千佳（お茶の水女子大学歴史資料館アカデミックアシスタント）、III～V章：土生朗治

6. 本書に関わる資料は水戸市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の方々・諸機関からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。

【個人】 佐々木義則、赤井博之

【機関】 茨城県教育庁文化課

8. 本書の作成にあたっては、高橋真弓、鬼山由子、仙波菜津美、根本正子、石山亜希子、大滝千晶、成田恵美の協力を得た。
9. 発掘調査参加者は以下の通りである。
市毛祐一、小山義則、川亦洋子、佐久間弘美、佐久間憲子、鈴木とし江、高安幸且、中井川肇、高田幸江

凡 例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図、水戸市発行2千5百分の1都市計画図である。
2. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。
SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 P：ピット SX：不明遺構 K：攪乱
3. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。
竪穴建物跡・土坑・ピット・不明遺構：1/60 カマド：1/30 全体図：1/200
4. 遺構一覧表・遺物観察表の表記は（ ）内数値が計測推定値を，[]内数値は残存値を表す。
5. 色調の表記は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
6. 遺構図で使用したアミカケは，次の通りである。 粘土範囲  焼土範囲 

本文目次

ごあいさつ

例言・凡例

本文目次

I	調査に至る経緯と調査の経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
II	遺跡の位置と環境	3
1	遺跡の位置	3
2	地理的環境	3
3	歴史的環境	4
4	小原遺跡における既往の調査	7
III	調査の方法と基本層序	9
1	調査の方法	9
2	基本層序	9
IV	遺構と遺物	11
1	竪穴建物跡	11
2	掘立柱建物跡	35
3	その他の遺構	38
V	総括	40

挿図目次

第1図	小原遺跡と周辺の遺跡	2	第12図	2号竪穴建物跡出土遺物(2)	19
第2図	小原遺跡調査地区位置図	3	第13図	3号竪穴建物跡	21
第3図	基本層序	9	第14図	3号竪穴建物跡カマド	22
第4図	小原遺跡全体図	10	第15図	3号竪穴建物跡出土遺物	22
第5図	1号竪穴建物跡	12	第16図	4号竪穴建物跡	24
第6図	1号竪穴建物跡カマド	13	第17図	4号竪穴建物跡出土遺物	25
第7図	1号竪穴建物跡掘り方	14	第18図	5号竪穴建物跡	27
第8図	1号竪穴建物跡出土遺物(1)	14	第19図	5号竪穴建物跡掘り方	27
第9図	1号竪穴建物跡出土遺物(2)	15	第20図	5号竪穴建物跡カマド	28
第10図	2号竪穴建物跡	17	第21図	5号竪穴建物跡出土遺物	29
第11図	2号竪穴建物跡出土遺物(1)	18	第22図	6号竪穴建物跡	31

第23図 6号竪穴建物跡出土遺物	31	第32図 2号掘立柱建物跡出土遺物	37
第24図 7号竪穴建物跡出土遺物	32	第33図 1号不明遺構	38
第25図 7号竪穴建物跡	33	第34図 1号不明遺構出土遺物	39
第26図 8号竪穴建物跡	34	第35図 遺構外出土遺物	39
第27図 8号竪穴建物跡出土遺物	34	第36図 善光寺2B窯跡出土遺物	40
第28図 9号竪穴建物跡	35	第37図 カマド両脇の壁柱穴と組み合う4本柱 主柱穴構造の竪穴建物例	41
第29図 9号竪穴建物跡出土遺物	35	第38図 草堂の図	42
第30図 1号掘立柱建物跡	36		
第31図 2号掘立柱建物跡	37		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	5	第9表 7号竪穴建物跡出土遺物観察表	32
第2表 小原遺跡における既往の調査一覧	7	第10表 8号竪穴建物跡出土遺物観察表	34
第3表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表	16	第11表 9号竪穴建物跡出土遺物観察表	35
第4表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表	20	第12表 2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	37
第5表 3号竪穴建物跡出土遺物観察表	23	第13表 1号不明遺構出土遺物観察表	39
第6表 4号竪穴建物跡出土遺物観察表	26	第14表 遺構外出土遺物観察表	39
第7表 5号竪穴建物跡出土遺物観察表	30	第15表 遺物集計表	44
第8表 6号竪穴建物跡出土遺物観察表	31		

写 真 図 版 目 次

写真図版1 調査区全景, 1号竪穴建物跡	写真図版7 2号竪穴建物跡出土遺物	39 - 43
写真図版2 1号竪穴建物跡, 2号竪穴建物跡, 3号竪穴建物跡	3号竪穴建物跡出土遺物	44 - 49
写真図版3 4号竪穴建物跡, 5号竪穴建物跡, 6号竪穴建物跡	4号竪穴建物跡出土遺物	50 - 55
写真図版4 7号竪穴建物跡, 8号竪穴建物跡, 9号竪穴建物跡, 1号掘立柱建物跡, 2号掘立柱建物跡, 1号不明遺構	写真図版8 4号竪穴建物跡出土遺物	56 - 58
写真図版5 1号竪穴建物跡出土遺物	5号竪穴建物跡出土遺物	59 - 72
写真図版6 2号竪穴建物跡出土遺物	写真図版9 5・6・7・8・9号竪穴建物跡出土遺物	73 - 81
	2号掘立柱建物跡出土遺物	82
	1号不明遺構出土遺物	83 - 86
	遺構外出土遺物	87 - 91

I 調査に至る経緯と調査の経過

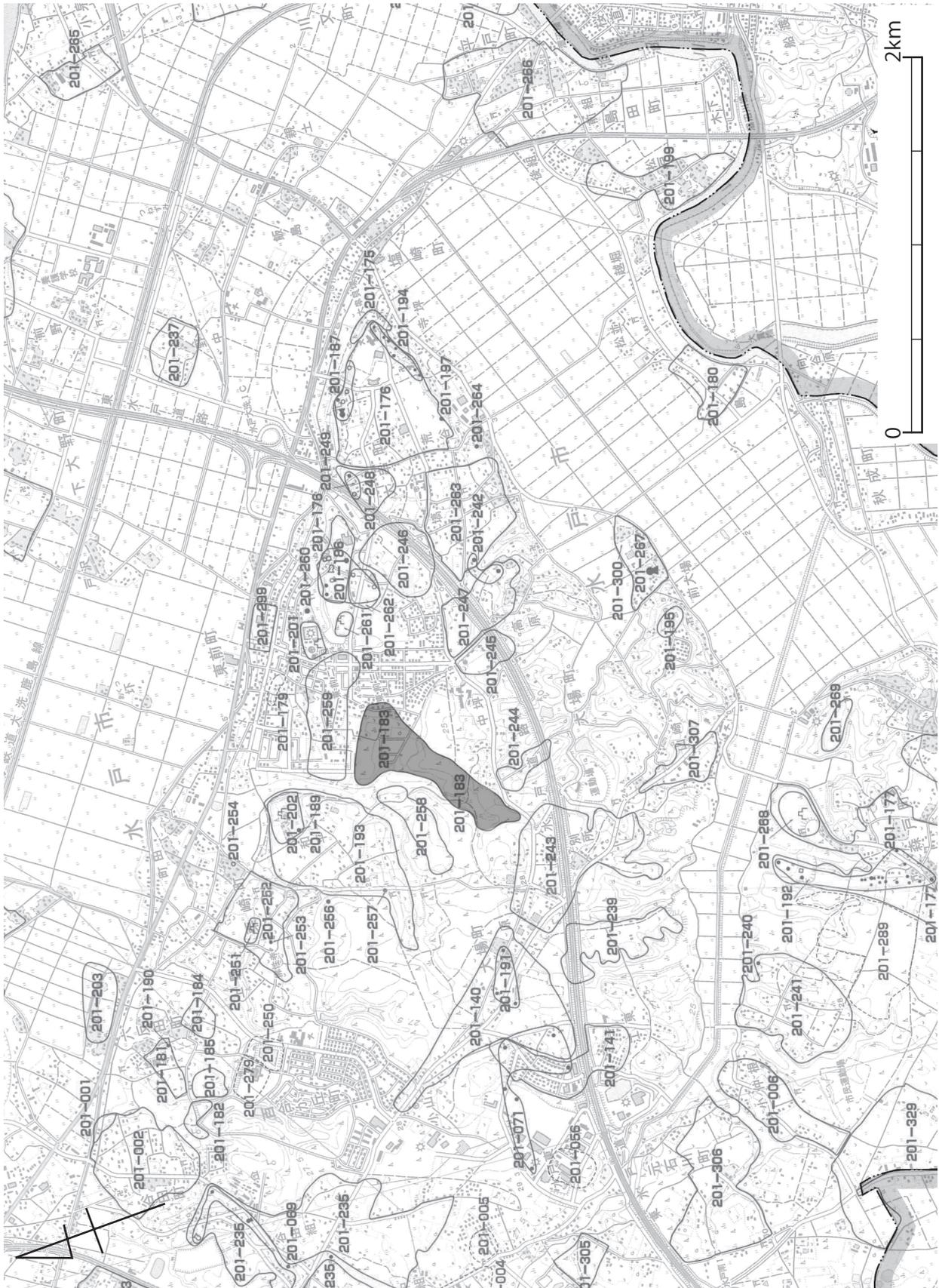
1 調査に至る経緯

平成25年10月29日付けで水戸市長高橋 靖（東前開発事務所扱）から、水戸市教育委員会（以下、市教委）教育長あて、埋蔵文化財の取扱いについて照会文書が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地「小原遺跡」内に該当しており、工事着手の60日前までに文化財保護法第94条第1項に基づく通知を茨城県教育委員会教育庁あて提出する必要があること、通知提出後に県教育委員会教育長から埋蔵文化財の取扱いについて通知があること、遺跡の発掘調査や現状保存を必要とする場合には、原因者の協力をお願いする旨回答した（平成26年6月28日付け教埋第1106号）。

その後、平成26年6月13日・19日に開発対象地内において試掘・確認調査を実施したところ、埋蔵文化財が確認された。この調査結果に基づき原因者である東前開発事務所と保存について協議を重ねたが、計画変更等は困難であることから、東前開発事務所から提出のあった文化財保護法第94条第1項に基づく通知に、記録保存を目的とした本発掘調査の実施が相当である旨、意見書を付して茨城県教育委員会（以下、県教委）教育長あて進達した。この通知に対し、県教委教育長から工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構が確認された場合には、その保存について別途協議する旨の指示・勧告があった（平成26年7月5日付け文第815号）。市教委は工事対象地10,000㎡のうち、埋蔵文化財が確認された面積621.25㎡を調査対象地とし、平成27年1月26日から2月27日の期間に本発掘調査を実施した。

2 調査の経過

平成27年1月26日小原遺跡第3地点表土除去作業を開始する。1月28日に遺構の確認作業を開始し、大型の1号竪穴建物跡以下竪穴建物跡9軒と掘立柱建物跡2棟、不明遺構1基を確認する。29日には1・2号竪穴建物跡の掘り込み作業開始する。2月7日に5号竪穴建物跡、10日に9号竪穴建物跡の掘り込みを開始する。20日には、掘立柱建物跡の掘り込みも終了し、竪穴建物跡の床下調査を行う。23日に空撮による全景写真を撮影する。その後ピットや土坑の調査もれがないことを確認し、現地調査を完了する。



第1図 小原遺跡と周辺の遺跡

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

水戸市は茨城県中央部のやや東よりに位置しており、北はひたちなか市と那珂市、西は城里町と笠間市、南は茨城町、東は大洗町に接している。

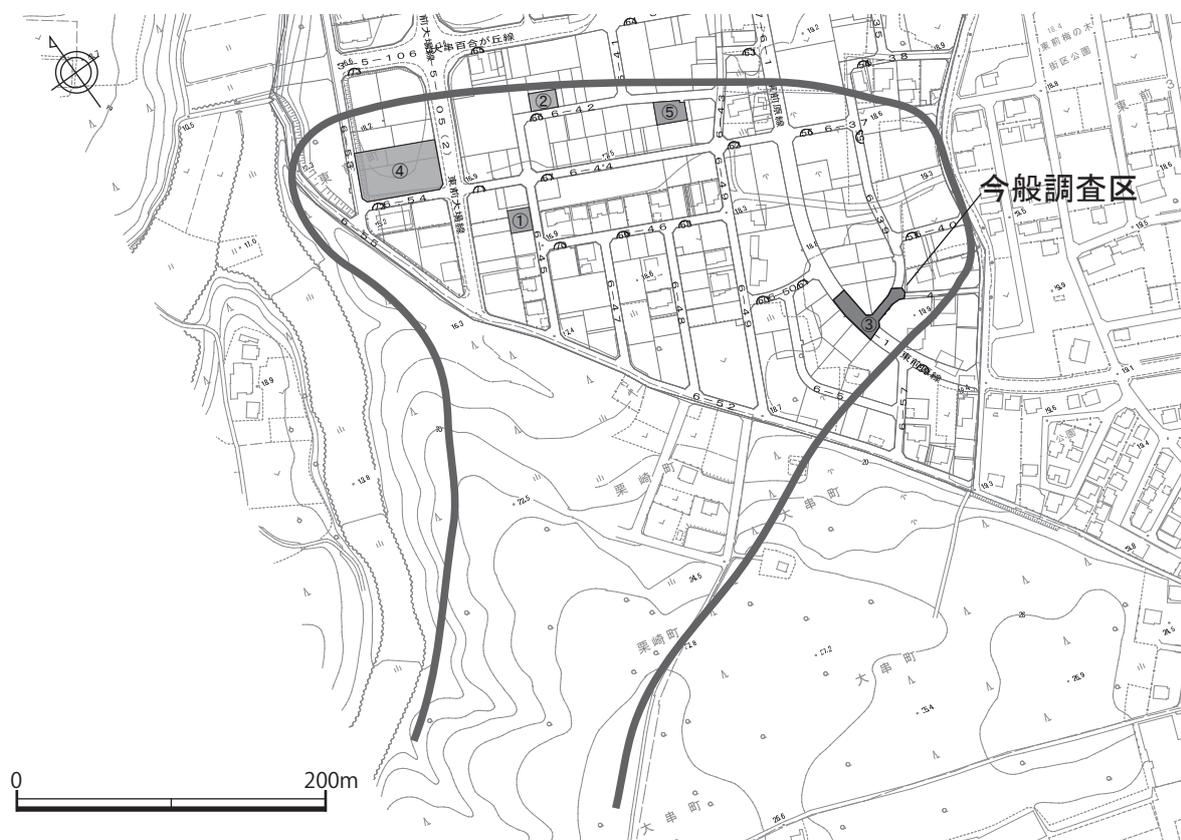
小原遺跡は水戸市東部の東前町に所在する。東前町は大洗・鹿島方面に向かう国道51号線近くに東前団地として宅地開発が行われている地域を含む。

小原遺跡は東前団地南西部の台地上にあり、宅地化した部分と未着手の畑地・山林が残る場所である(第1図)。地元の熱心な収集家により、付近からは、古墳時代前期の土師器や奈良・平安時代の須恵器・土師器等が採集されており、奈良・平安時代の須恵器には中空円面硯も確認されている。

2 地理的環境

今般対象となった第3地点は、東経140度31分37秒、北緯36度20分14秒に位置する茨城県水戸市東前町1061, 1062-1, 1064, 1065番地地内に所在する(第2図)。

水戸市は、関東平野の北東部を占める常総台地、なかでも茨城台地北部に位置している。太平洋に近いが海岸には面していない。市域北部は八溝山地を横切る那珂川下流にのぞみ、茨城台地の一部である



第2図 小原遺跡調査地区位置図

水戸台地の西北端には、八溝山地外縁の丘陵がつづく。

周辺地形 周囲の地形に目を移すと、北部の阿武隈山地に属する多賀山地は、太平洋岸の海岸段丘からなる多賀海岸平野を形成し、阿武隈山地から分かれる久慈山地と八溝山地の間には、久慈川の浸食谷がつくられている。さらに八溝山地に属する鶏足山塊と筑波山塊の間には、笠間市の谷盆地がある。

一方、水戸市の南部には常総平野が展開し、関東平野の一部をなす。このように南部の平野と西部の笠間市の谷盆地、北部の久慈川の谷、多賀海岸平野などを結ぶ基点として水戸市を地形的に位置づけることができる。こういった点から歴史的にみて、水戸市域は水陸交通の拠点であるといえる。

地形区分 水戸市の地形は、北部から東部に流れる那珂川を中心に構成される沖積層の低地、茨城台地の北東部をなす水戸台地（上市台地・緑岡台地など）と呼ばれる沖積層の台地、鶏足山塊の外縁部をなす第三紀の丘陵の三つに区分される。洪積層台地のうち、那珂川と涸沼川との合流点に向かって突き出た台地はとくに吉田台地と呼称される。

当該遺跡は、吉田台地の先端に近い那珂川に面した標高 20 m 前後の台地上に立地する。付近には先土器時代から近世にかけて多くの遺跡が立地するが、近年ニュータウン建設などをはじめとした宅地化が急速に進んでおり、往時の景観は次第に失われつつある。

3 歴史的環境

小原遺跡が立地する吉田台地、特にその東端部には、先土器時代から近世に至るまでの多数の遺跡が形成されている。ここでは、小原遺跡の周辺に分布する遺跡群の既往の調査成果を中心に歴史的環境を概観する。

先土器時代～縄文時代草創期 小原遺跡周辺における人類の土地利用は先土器時代にまで遡る。当該期の資料は、石川川を挟んだ南側の台地に立地する森戸古墳群と元石川大谷原遺跡からの出土例が知られている。森戸古墳群第 12 号墳（大六天古墳）の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。石器群の大半は墳丘盛土・周溝覆土内からの出土品であるが、剥片 1 点が周溝底面のローム層中から出土している（伊東 1976）。森戸古墳群の西側に展開する元石川大谷原遺跡では古墳時代後期の竪穴建物跡からガラス質黒色安山岩製の剥片が 1 点出土している（川口・色川・渥美・片平 2008）。これらの資料のほか、周知の埋蔵文化財包蔵地内の採集ではないが、百合が丘町・下入野町地内等において、ガラス質黒色デイスイトや硬質頁岩製の神子柴型尖頭器が採集されている（川口 2005・2008）。

縄文時代 縄文時代の遺跡として著名なのは大串貝塚である。大串貝塚は『常陸国風土記』那賀郡条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国の史跡に指定されているが、豊富な出土資料は、質・量ともに茨城県下における当該時期の貝塚を凌駕している（水戸市教育委員会 2010）。下畑遺跡では、加曾利 E 式・大木 8 b 式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が確認されており（井上 1985）、複式炉を有する竪穴建物跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人類の営みをうかがうことができる。

弥生時代 弥生時代の人々の生活の痕跡は他の時代に比べてやや低調な傾向にあるが、薄内遺跡第 1 地点では、遺構に伴わないものの土器の器面の表裏に条痕文を施す前期末から中期初頭の土器が多数出

第 1 表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
201-006	下畑遺跡	集落跡	縄文土器（中・後），石器（打製石斧・石鏃・石錘・凹石・磨石・石棒・石剣），土製品（土器片錘），土師器（古後）	
201-175	大串貝塚	貝塚	縄文土器（前・後），石製品，貝刃，骨角製品（釣針・刺突具）	国史跡
201-176	大串遺跡	古墳 集落跡 官衙	縄文土器（早・前・後），石器（有舌尖頭器・石鏃・礫器・磨製石斧・敲石・磨石），骨角製品（釣針・刺突具），貝刃，自然遺物（貝・獸骨・魚骨），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），土製品（土玉・土錘・紡錘車），石製品（管玉・砥石・炉石・軽石），金属製品（鎌・刀子）	S62, S63, H6, H8, H14, H17, H19 調査
201-183	小原遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	本遺跡
201-185	薄内遺跡	集落跡	剥片（先土器），縄文土器（早・前・中・後），弥生土器（前・中・後）石器（石鏃未成品・石鏃・剥片・磨石・敲石・台石），土師器（古・奈），土製品（紡錘車・錘），金属製品（鏃・不明製品），陶器，磁器	
201-186	金山塚古墳群	古墳群	円筒埴輪，金属製品（鉄鏃・刀子）	前方後円 0 (1), 円 3 (5) S26 年調査
201-187	大串古墳群	古墳群	五獣鏡・銅環・直刀・鉄鏃・壺鏡・兵庫鎖・素和鏡板付轡	前方後円墳 1, 円 1 (5)
201-192	森戸古墳群	古墳群	台形様石器？・剥片（先土器），底部穿孔壺，円筒埴輪，形象埴輪，石製品（勾玉）	前方後円 1, 方 0 (1), 円 15 (17)
201-193	上平遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），墨書土器	
201-194	長福寺古墳群	古墳群		円 7
201-195	溜沼台古墳群	古墳群		円 7 ?
201-201	椿山館跡	城館跡		
201-242	高原古墳群	古墳群	弥生土器（後），須恵器（奈・平），瓦	円 2, H3・H6・H17 調査
201-202	和平館跡	城館跡		
201-235	町付遺跡	集落跡	縄文土器（早），弥生土器（後・終），石器（磨製石斧・勾玉），土製品（紡錘車），土師器（古前・中・奈・平），須恵器（奈・平），陶器，磁器，土師質土器	
201-244	諏訪前遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	
201-245	沢幡遺跡	集落跡	土師器（奈・平），須恵器（奈・平），墨書土器，円面硯，鉄製品（紡錘車・鏃・鎌）	
201-246	梶内遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），墨書土器，円面硯，金属製品（紡錘車・煙管・銭貨），陶器	
201-247	高原遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（奈・平），須恵器（奈・平），土師質土器，金属製品（煙管）	
201-248	北屋敷遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），瓦，陶器	
201-249	北屋敷古墳群	古墳群	縄文土器（早・前・中），弥生土器（後），土師器（前・中），石製品（石鏃・炉石），土製品（土玉・紡錘車），埴輪（円筒・形象），須恵器（奈・平）	円 1 (2)
201-258	打越遺跡	集落跡	土師器（奈・平），須恵器（奈・平）	
201-259	東前原遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	
201-262	大串原館跡	城館跡		
201-263	宮前遺跡	集落跡	土師器（奈・平），須恵器（奈・平）	
201-267	大場天神山古墳	古墳	弥生土器（後），三角縁神獸鏡，鉄剣，太刀	前方後円 ?1
201-289	元石川大谷原遺跡	集落跡	剥片（先土器），縄文土器（後），土師器（古後），須恵器（奈・平），墨書土器，灰釉陶器，土製品（土錘），鉄製品（鉸具・刀子・鏹・錠？），銭貨	

土している。さらに、遺構には伴わないものの中期前葉・中期末・後期末の土器も出土しており（日沖・石丸・川口・色川・新垣・渥美 2008）、当該期の遺構が周辺に展開している可能性が考えられる。後期になると水戸市域でも竪穴建物跡が検出される事例が多数確認されており、町付遺跡第1地点では後期後半の竪穴建物跡が1棟確認されている（南田・山本・土井・渥美 2009）。

古墳時代 古墳時代を迎えると、在地首長の墳墓とみられる大場天神山古墳、大串古墳群、長福寺古墳群、高原古墳群、金山塚古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、涸沼台古墳群、森戸古墳群など古墳の築造活動が活発化し、その周辺に集落跡が展開する状況がうかがえる。発掘調査は行われていないが、大場天神山古墳からは波文帯三角縁神獣鏡・鉄剣・太刀が不時発見されており、前期古墳とみられる。波文帯三角縁神獣鏡は、現在のところ日本列島における舶載鏡の東限である。

森戸古墳群第12号墳（大六天古墳）からは、底部穿孔壺や滑石製の勾玉が報告されており（伊東1976）、前・中期から形成されていた可能性が高い。また、大串古墳群の範囲内にある稻荷神社境内からは、五獣鏡・銅環・直刀・鉄鏃・壺鐙・兵庫鎖・素和鏡板付轡などが出土しており、中期後半から後期にかけての副葬品である（東京国立博物館 1980）。これらの副葬品が帰属する古墳は定かではないが、前方後円墳である大串稻荷神社古墳が想定されよう。

後期になると埴輪を樹立した古墳が多数築造されるようになる。北屋敷古墳群第2号墳からは、武人埴輪をはじめ巫女埴輪や馬形埴輪など多数の形象埴輪と円筒埴輪が出土している（井上・千葉 1995）。前方後円墳である森戸古墳群第1号墳からは踏査の際に円筒埴輪、楕形埴輪、家形埴輪、馬形埴輪が墳丘上より採集されており、6世紀代の築造と考えられる。また、墳丘形態は未詳だが、第2号墳からは歯の表現がなされた人物埴輪も出土しており（吉川 1991）、楯持ち埴輪であった可能性が高い。

後期から終末期にかけての古墳とみられるのは北屋敷古墳群第1号墳である。同古墳は、北関東自動車道東水戸道路の敷設に伴う発掘調査の際、埴輪を伴わず、礫床切石積みの横穴式石室を持つ直径14mの円墳であることが確認され、副葬品として直刀・刀子・鉄鏃などが出土している（梶山 1993）。

次に集落遺跡の動向を見てゆこう。前期から中期前半の集落は、大串遺跡・北屋敷遺跡・薄内遺跡・町付遺跡で竪穴建物跡が多数確認されている（井上 1994、井上・金子 1996、日沖・石丸・川口・色川・新垣・渥美 2008、南田・山本・土井・渥美 2009）。中期の集落跡は北屋敷遺跡において竪穴建物跡が2棟確認されているのみで（梶山 1993）、前期と比べて検出例が少ないことから遺跡の立地に変動が生じた可能性を示唆する。後期になると集落遺跡が広く展開する状況がうかがえ、小仲根遺跡・大谷原遺跡・梶内遺跡等で6世紀代の竪穴建物跡が検出されている（川口・小川・大淵 2002、川口・色川・渥美・片平 2008、櫻村 1995）。特に6世紀に営まれたとみられる竪穴建物跡は7mを超える大型のものが多く特徴がある。終末期の集落遺跡は検出例が乏しく、梶内遺跡と大串遺跡第7地点で竪穴建物が数棟確認されているに留まる（櫻村 1995、小川・大淵・川口・木本・渥美・関口・株式会社京都科学 2008）。

奈良・平安時代 奈良・平安時代となり、律令制下との中央集権体制が構築されていくなか、水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及びその周辺寺院の造営が渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において展開し、その支配体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は市域全域が常陸国那賀郡域内にあり、小原遺跡の周辺は芳賀里（郷）に否定される（中山 1979）。小原遺跡の周辺に展

開する当該期の遺跡で注目されるのは大串遺跡である。第7地点の発掘調査の際、断面V字状を呈する大型の区画溝によって圍繞された内部に整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されたほか、束柱を持ち壺地業を有する桁行6間×梁間3間の大型の掘立柱建物跡等も確認されている（小川・大淵・川口・木本・渥美・関口・株式会社京都科学 2008）。大型の掘立柱建物跡の柱抜取穴からは、多量の炭化材とともに炭化米が、区画溝からは炭化した穎稻や穀稻が出土しており、3棟の礎石建物跡が正倉、大型の掘立柱建物跡が穎屋もしくは倉の代用として建築された揚げ床の倉代であった可能性が指摘されている。このほか、「厨」銘墨書土器の出土など、官衙的色彩の強さが目立つ当該地点の遺構群は、那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている（小川・大淵・川口・木本・渥美・関口・株式会社京都科学 2008）。

大串遺跡の西側に展開する梶内遺跡は、8世紀から10世紀まで、土地利用が希薄になる時期が存在するものの、比較的長く継続する集落跡として看過することができず、「舎人」・「長」や里（郷）名を記載した「芳」銘墨書土器、9点の円面硯が出土しており、官衙周辺集落とみられる（樫村 1995）。

中・近世 中世に武士が実権を握る時代となり、小原遺跡が所在する旧常澄村域と重なる恒富郷を支配していたのは、常陸平氏大塚氏の一流である石川氏であった（常澄村史編さん委員会編 1989）。小原遺跡周辺に位置する当該期の遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土塁の残存が報告されているが、発掘調査は行われておらず、年代については不明な点が多い（水戸市教育委員会 1999）。近世において当該時期の台地上は、水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言い難いが、当該時期に帰属する溝跡や土坑等は梶内遺跡や北屋敷遺跡、高原遺跡、伊豆屋敷跡等で検出されており（梶山 1993, 樫村 1995, 井上 1998）、土地利用の痕跡を窺うことはできる。これらの遺構の大半は村落に伴うものと考えられるが、北屋敷遺跡第1地点から検出された第22号土坑からは、人骨とともに伊万里の花瓶・煙管・寛永通宝6枚・印籠が副葬品として出土しており、墓坑と考えられる（梶山 1993）。伊豆屋敷跡は『新編常陸国誌』等に立原伊豆守の居所を記されており、発掘調査の結果、3条の土塁と1条の溝跡が確認されている（井上 1998）。

4 小原遺跡における既往の調査

当該調査の報告書刊行時において、小原遺跡における発掘調査は計5地点において行われている（第2図・第2表）。

第2表 小原遺跡における既往の調査一覧

地点名	調査箇所	調査	種別	調査原因	遺構	遺物
第1地点	東前町 1049-4	H24	試	個人住宅建築	—	—
第2地点	東前町 1150-3	H26	試	個人住宅建築	—	—
第3地点	東前町 1056～1065	H26	試/本	土地区画整理事業	○	○
第4地点	東前原第二区画整理地 73 街区 2・3・6	H26	試/本	個人住宅建築	○	○
第5地点	東前原第二区画整理地 66 街区 20	H26	試	個人住宅建築	○	○

これらのうち、本調査以外で遺構・遺物が確認されたのは第4地点・第5地点である。記録保存を目的とした本発掘調査に至ったのは現時点では第4地点である。第4地点からは、6世紀、7世紀後半、8世紀、9世紀にかけての竪穴建物跡群が一部重複する状態で検出されており、本地点に先行する集落跡や同時期の集落跡が広く展開している状況がうかがえる。また、9世紀代に帰属する一部の竪穴建物跡からは、本地点で出土したのと同じ「宮」のほか、「口厨」と釈読できる墨書土器も出土しており、周辺に展開する那賀郡衙正倉別院と平津駅家の複合遺跡とみられる大串遺跡（第7地点）や官衙周辺集落とみられる梶内遺跡との関連性が想起される。

Ⅲ 調査の方法と基本層序

1 調査の方法

調査区は水戸市教育委員会による試掘の結果をもとに設定した。表土除去は重機を使用して遺構確認面まで掘り下げた。その後人力作業により遺構確認を行い、堅穴建物跡9棟、掘立柱建物跡2棟、不明遺構1基を確認し、遺構の掘り下げを行った。遺構の測量は、世界測地系平面直角座標第IX系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、調査範囲外側の北西角のX軸37,304、Y軸62,508を起点として、南方向と東方向に4mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目にA1からJ12までグリッド名を振り遺構の位置を示した。

調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/20を使用した。遺跡全測図は1/200で作成した。写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

2 基本層序 (第3図)

調査区の基本堆積土層は、A地点で記録した(第4図)。

I層は黒ボク層で、約10cmの厚さがあり、やや粘性と締まりがある。

III層はII層からIV層への漸移層である。

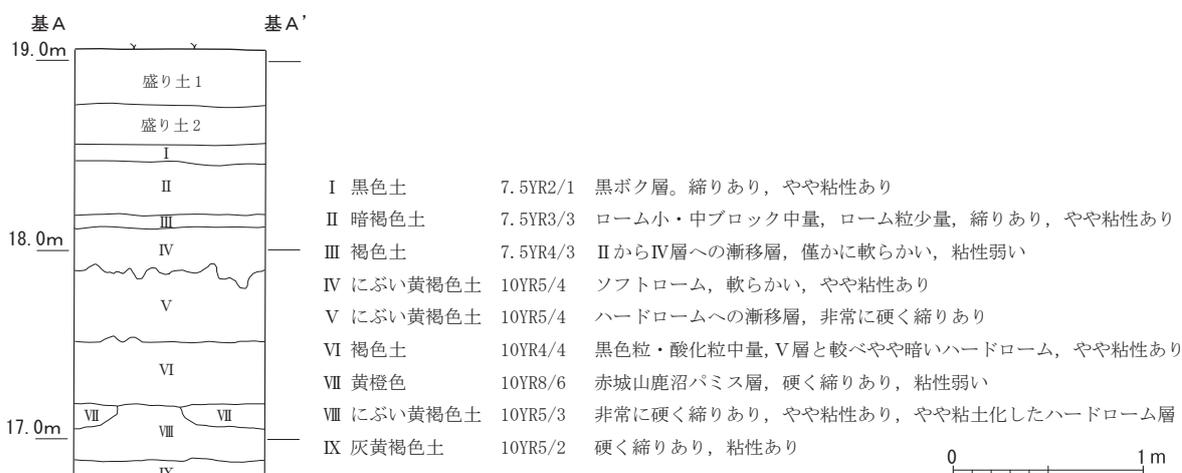
IV層はソフトローム層である。

V層はIV層とほぼ同色だがハードローム化していて、VI層のハードローム層への漸移層である。

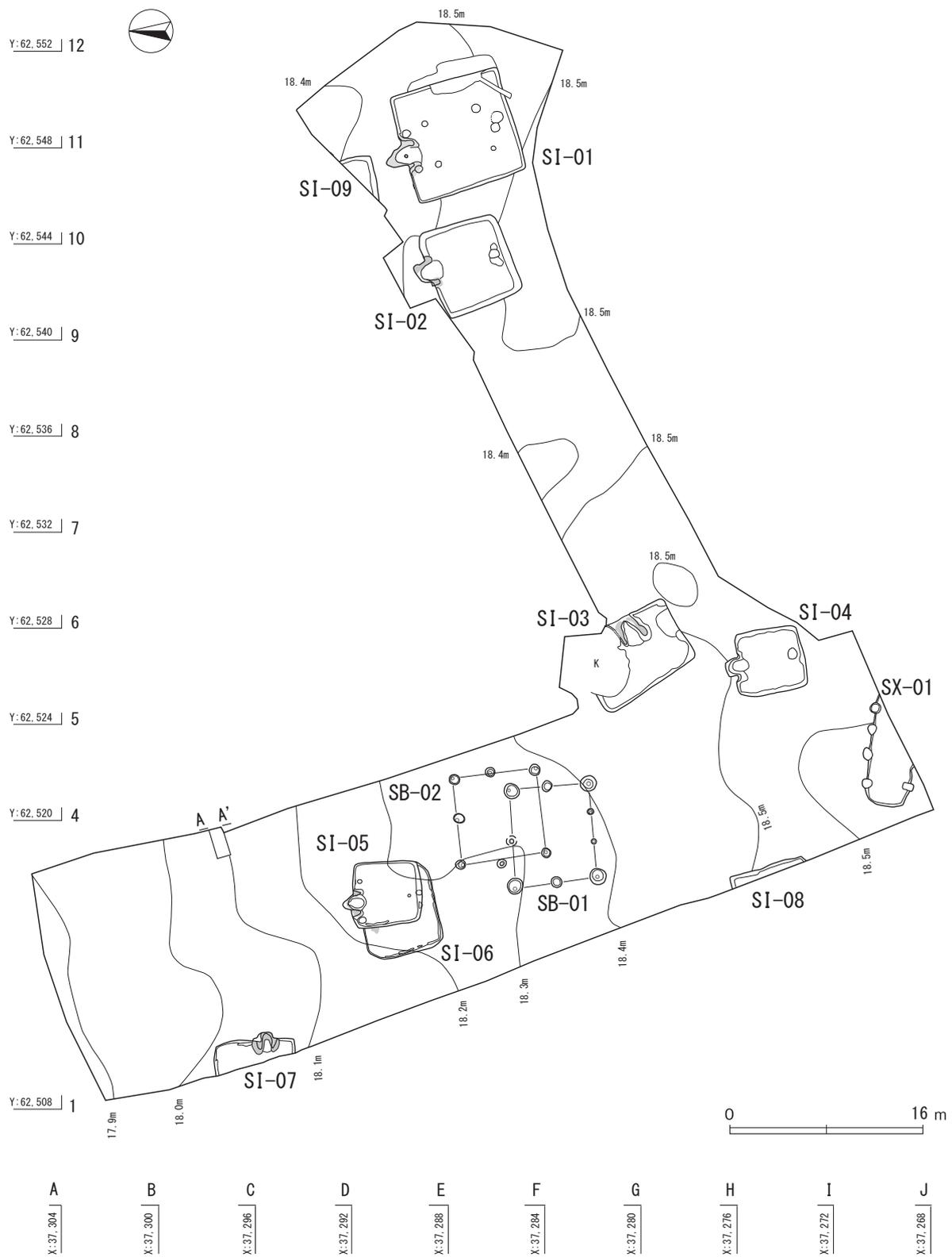
VI層はやや暗いハードローム層でやや粘性がある立川ローム層の第二暗色帯と考えられる。

VII層は赤城山鹿沼パミス(Ag-KP)である。

VIII層は黄褐色のハードローム層、IX層は灰黄褐色のハードローム層でいずれも粘性がある。



第3図 基本層序



第4図 小原遺跡全体図

IV 遺構と遺物

1 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡 (第5・6・7・8図, 第3表, 写真図版1・2・5)

位置 調査区東部にある。

規模と平面形 南北方向4.56 m, 東西方向4.52 mのほぼ正方形。

主軸方向 N-18° -E

壁 壁は約43 cmの高さまで残存し, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で, 西側4分の1程度と北東部分を除いて全体に硬化している。東壁中央部からやや南寄りにかけての床から壁が攪乱を受けている。床面の周囲の壁周溝は, 竪穴内の覆土を除去し床面を精査したところ, 幅4~10 cmで確認された。竪穴建物跡の掘り方は, 中央部がやや深くなるように掘られ, 出入りロピット付近も不整楕円形にやや深く掘り下げられている。壁周溝の掘り方は, 床面を厚さ約5 cm掘り下げた段階で確認できたもので, 幅約20 cm, 深さ8 cm前後の溝状である。

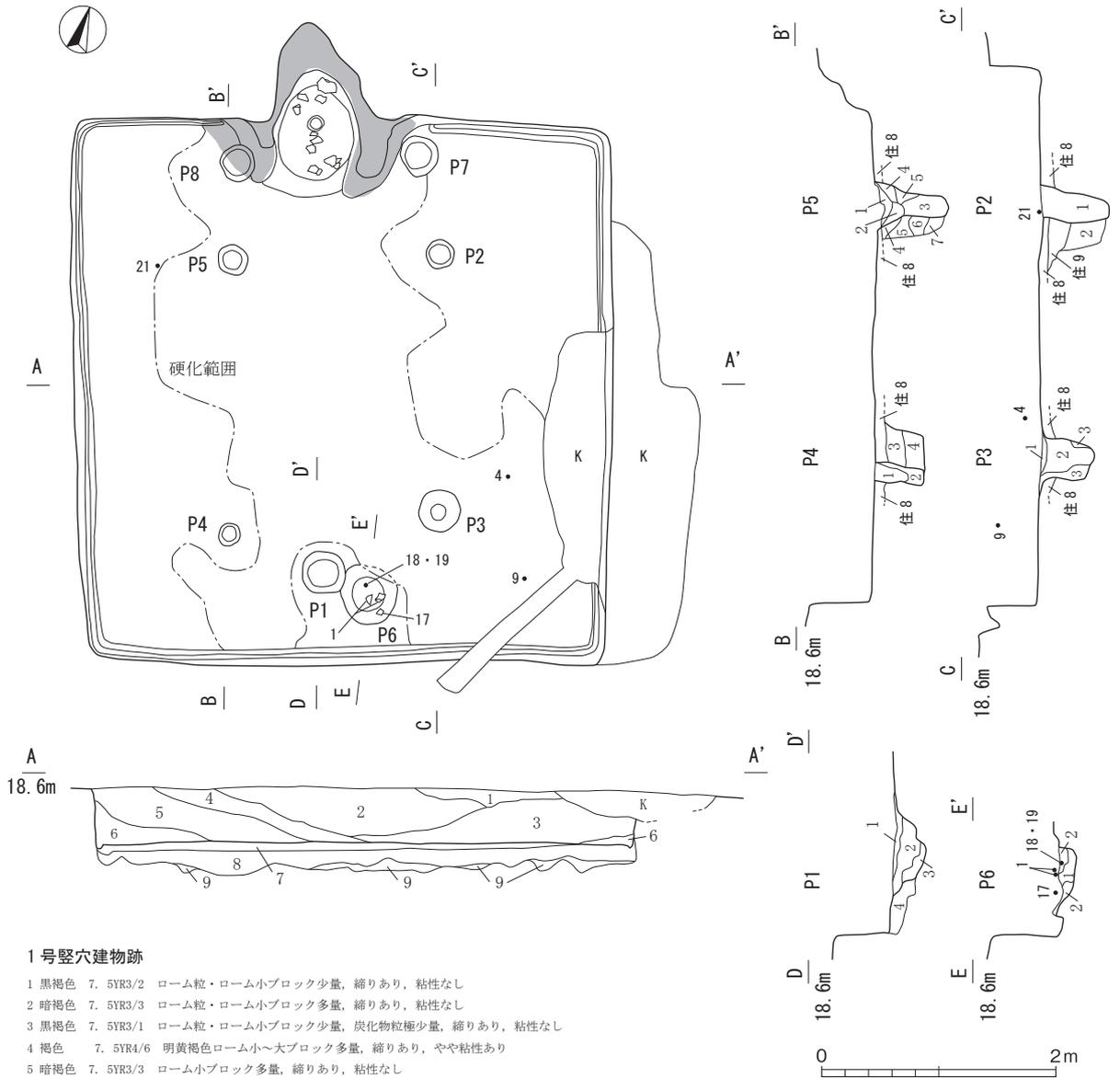
ピット 支柱穴は, 床面中央のP2・P3・P4・P5である。P2は下端長径約25 cmのやや細身の楕円形の掘り方をもっており, これとは別にやや内側の南西にずれた位置に一辺約30 cm以上の方形の掘り方が確認された。このことから, P2は方形から楕円形掘り方へと, 一度柱の据え替えを行っていると考えられる。古い方形の掘り方は貼り床に覆われて床面では確認できないことから, 柱の据え替え後, 床面を再構築していると思われる。P3~P5の断面観察では細身の柱穴と, それを囲むやや大きい掘り方が確認できる。P2と同様, 大きい掘り方が古い時期でP3~P5も柱の据え替えを行ったと考えられる。

カマド調査の過程で4本の支柱穴以外に, 支柱に相当する深さと規模をもつP7・P8がカマドの両袖外側に確認された。P3・P4と組み合せて, 床面中央の支柱穴に次ぐ時期の4本支柱穴となる可能性が高い。

P1は掘られた位置と掘り込みの形状・土層の堆積状況から見て, 出入りロピットと思われる。P6はそれより古い出入りロピットの抜き取り穴になるものと見られ, ここから須恵器坏片や砥石が出土している。P6は支柱穴P2・P3・P4・P5, P1は同P3・P4・P7・P8の時期に対応すると考えられる。

カマド 北壁の中央からやや西に位置し, カマドの中心から東側の北壁幅を1.0とした場合, 西側の北壁幅の比率は0.85である。カマドの規模は両袖外側で全幅1.4 m, 各袖幅は0.54から0.66 m, 燃焼室の幅は0.65 m, 焚き口から支脚設置位置までの奥行きは0.6 m, 燃焼室全体の奥行きは煙道部に向かう傾斜の変換点までで0.93 mある。両袖部とも燃焼室奥壁から貼り付けられた灰褐色粘土を主体として構築されている。カマドの中心位置をカマド甕の位置, つまり支脚の設置痕の位置とすると, カマドの中心はカマド左右の北壁を結んだ線上に位置する。

覆土 確認面からの覆土の厚さは40 cm程度で, 1~6層に分層した。東西南北の各壁際には黒褐色の6層が自然堆積層と見られる三角堆積をしている。1~5層は人為的な埋め戻し土層と見られ, ローム粒やローム小ブロックの含有が多い。5層と4層は西壁側から埋められた堆積状況で, 暗褐色土の5層



1号竪穴建物跡

- 1 黒褐色 7. 5YR3/2 ローム粒・ローム小ブロック少量, 締りあり, 粘性なし
- 2 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム粒・ローム小ブロック多量, 締りあり, 粘性なし
- 3 黒褐色 7. 5YR3/1 ローム粒・ローム小ブロック少量, 炭化物粒極少量, 締りあり, 粘性なし
- 4 褐色 7. 5YR4/6 明黄褐色ローム小〜大ブロック多量, 締りあり, やや粘性あり
- 5 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム小ブロック多量, 締りあり, 粘性なし
- 6 黒褐色 7. 5YR3/2 ローム粒・ローム小ブロック少量, 軟らかい, 粘性なし
- 7 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム小〜中ブロック少量, 非常に締りあり, やや粘性あり
- 8 暗褐色 7. 5YR3/4 ローム粒多, ローム小〜大ブロック多量, 締りあり, やや粘性あり
- 9 褐色 7. 5YR4/4 ローム中・大ブロック主体, 締りあり, やや粘性あり

1号竪穴建物跡 P1

- 1 褐色 7. 5YR4/3 ロームブロック多量, ローム中ブロック少量, 締りあり, 粘性なし
- 2 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム小〜中ブロック中量, 締りあり, 粘性なし
- 3 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム小〜中ブロック多量, 締りあり, やや粘性あり
- 4 褐色 7. 5YR4/3 ローム小〜中ブロック中量, 締りあり, やや粘性あり

1号竪穴建物跡 P2

- 1 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム粒多量, ローム小ブロック中量, 軟らかい
- 2 褐色 7. 5YR4/3 褐色ローム小〜大ブロック多量, やや締りあり, 粘性なし

1号竪穴建物跡 P3

- 1 黒褐色 7. 5YR3/2 ローム粒少量, やや軟らかい
- 2 褐色 7. 5YR4/3 ローム粒・ローム小ブロック主体, 軟らかい, 粘性なし
- 3 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム粒多量, ローム小ブロック多量, やや軟らかい

1号竪穴建物跡 P4

- 1 黒褐色 7. 5YR3/2 ローム粒少量, やや軟らかい
- 2 褐色 7. 5YR4/3 ローム粒・ローム小ブロック主体, 軟らかい, 粘性なし
- 3 褐色 7. 5YR4/3 ローム小〜大ブロック主体, 炭化物粒少量, 締りあり, やや粘性あり
- 4 褐色 7. 5YR4/3 ローム小〜大ブロック主体, 締りあり, やや粘性あり

1号竪穴建物跡 P5

- 1 暗褐色 7. 5YR3/4 ローム粒中量, 軟らかい, 粘性なし
- 2 黒褐色 7. 5YR3/2 ローム粒少量, 軟らかい, 粘性なし
- 3 褐色 7. 5YR4/3 ローム粒中量, 軟らかい, 粘性なし
- 4 褐色 7. 5YR4/3 ローム粒多量, やや軟らかい, 粘性なし
- 5 褐色 7. 5YR4/3 ローム小〜大ブロック多量, やや締りあり, 粘性なし
- 6 褐色 7. 5YR4/3 ローム小〜大ブロック多量, やや締りあり, 粘性なし
- 7 褐色 7. 5YR4/4 ローム主体, 締りあり, 粘性弱い

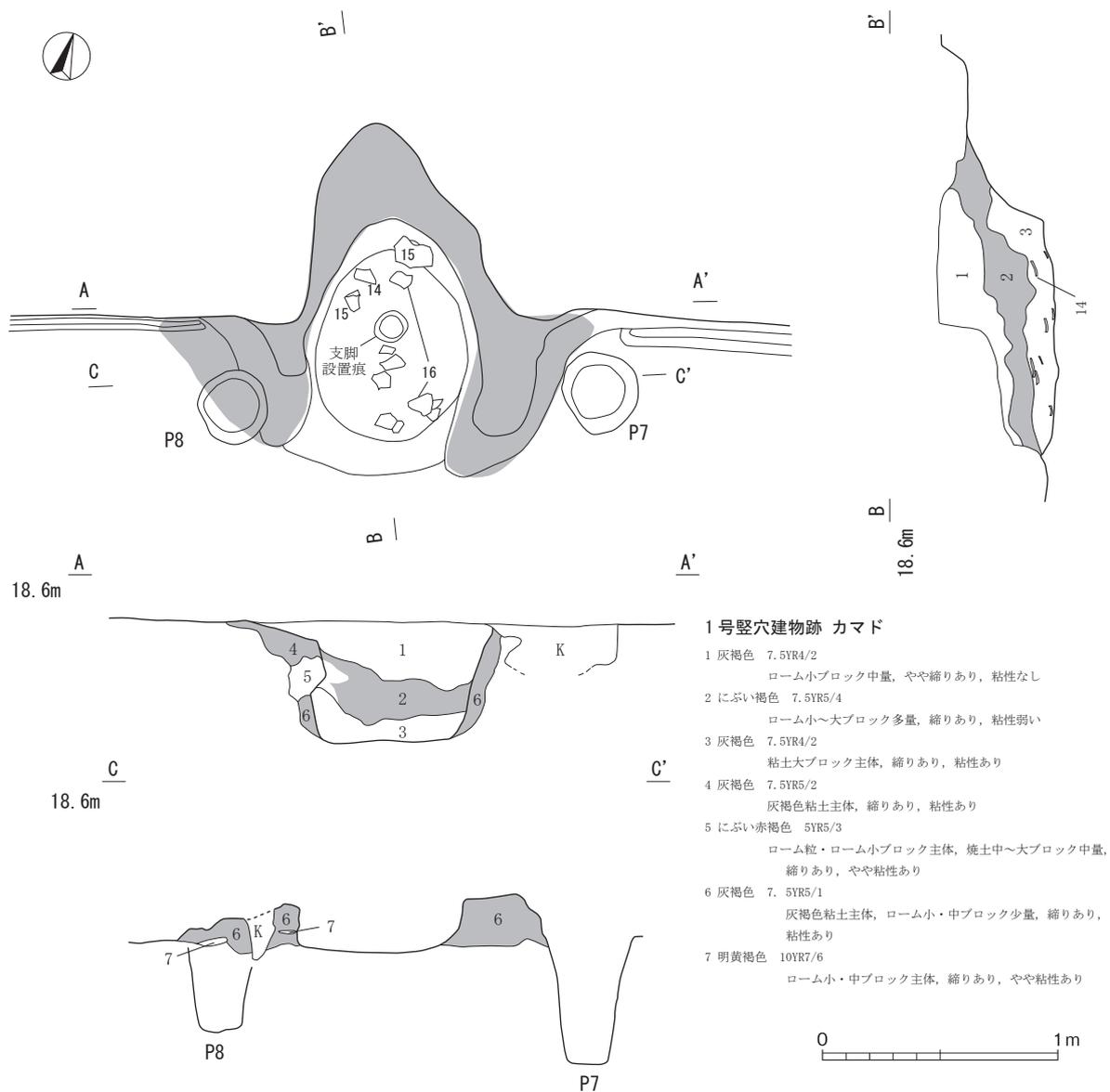
1号竪穴建物跡 P6

- 1 黒褐色 7. 5YR3/2 ローム粒少量, 軟らかい, 粘性なし
- 2 暗褐色 7. 5YR3/3 ローム粒中量, ローム小ブロック多量, 締りあり, やや粘性あり

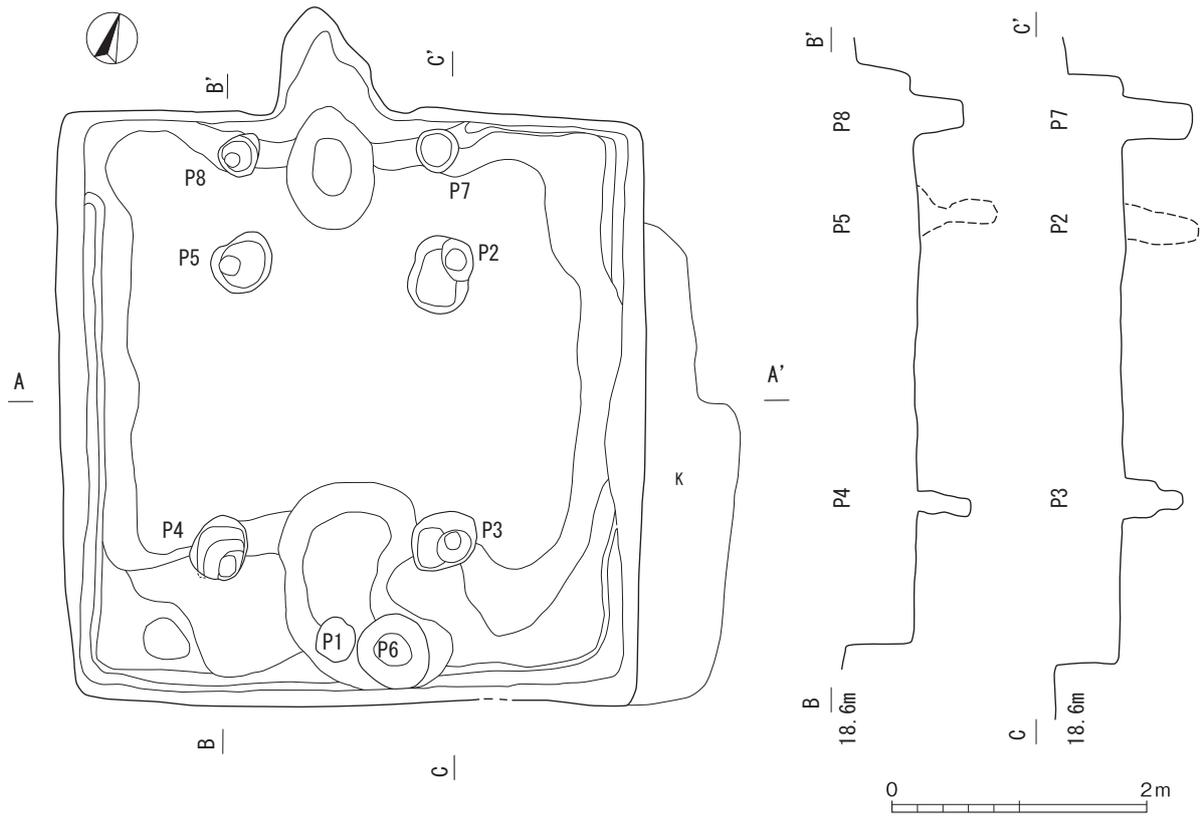
第5図 1号竪穴建物跡

の上に、地山の関東ローム層を直接掘削して流し込んだような、ほとんど混じりのない褐色土の4層が堆積している。次に東壁側の壁際に積み上げるようにロームブロック混じりの黒褐色土の3層，中央部に暗褐色土の2層が入れている。

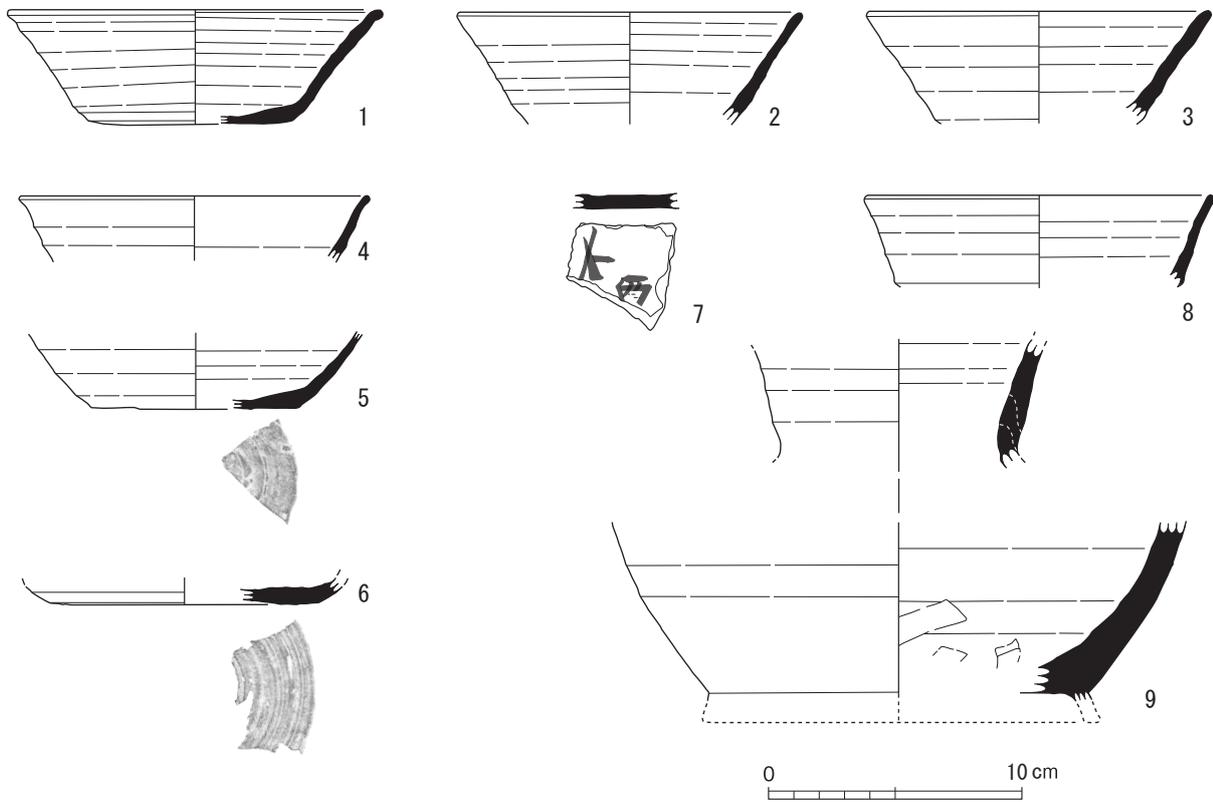
遺物 出土遺物は須恵器と土師器，砥石，鉄製品の刀子と鎌，角棒状の不明品である。須恵器の器種は坏，壺，鉢（甑）があり，土師器は甕と小型甕がある。遺物の大多数はカマド内覆土，柱穴，床上からの出土である。1の須恵器坏，17の砥石，18の刀子はP6覆土上層から，2の須恵器坏はカマド脇のP7覆土から出土している。14の土師器甕はカマド袖部・床下から，15の土師器甕体下半部片はカマド・床から出土している。



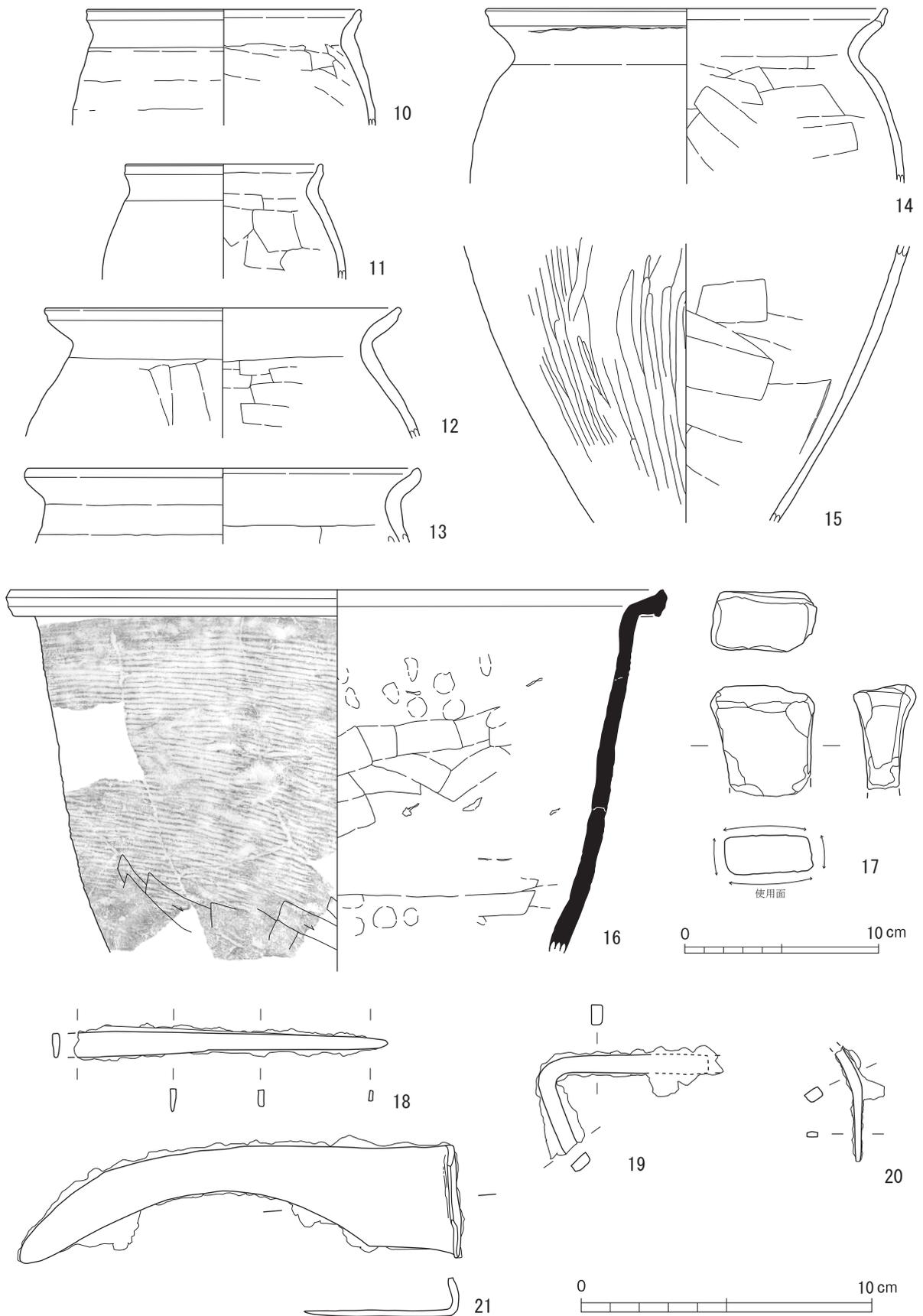
第6図 1号竪穴建物跡カマド



第7図 1号竪穴建物跡掘り方



第8図 1号竪穴建物跡出土遺物(1)



第9図 1号竖穴建物跡出土遺物(2)

第3表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 注記
			口径	底径	器高							
1	SI01	須恵器・坏	14.8	8.1	4.6	底部回転切り離し後オサエ、丁寧なロクロ調整でロクロ目が弱い	40%	長石、石英、海綿骨針、チャート	普通	灰色：7.5Y6/1		No13, 14
2	SI01	須恵器・坏	(13.6)	—	—	丁寧なロクロ調整	20%	石英、海綿骨針、チャート	普通	灰色：7.5Y5/1		P7
3	SI01	須恵器・坏	(13.6)	—	—	—	20%	長石、石英、海綿骨針、チャート	普通	灰色：7.5Y5/1		3区一括
4	SI01	須恵器・坏	(13.8)	—	—	—	口縁部小片	石英	普通	灰色：5Y6/1		P1
5	SI01	須恵器・坏	—	(8.2)	—	底部回転ヘラ切り離し無調整	14%	長石、石英、海綿骨針、チャート	良好	灰色：5Y6/1		P1一括
6	SI01	須恵器・坏	—	(10.6)	—	底部回転ヘラケズリ、ロクロ左回転	底部片	石英、海綿骨針、チャート	良好	灰色：7.5Y6/1		3区一括
7	SI01	須恵器・坏	—	—	—	底部外面墨書	底部片	石英、雲母、長石	普通	灰白色：5Y7/1		1区一括
8	SI01	須恵器・坏	(13.8)	—	—	丁寧なロクロ調整	17%	海綿骨針、長石	良好	灰色：7.5Y6/1		壁溝、1区一括
9	SI01	須恵器・壺	—	(15.8)	—	外面一部自然軸	底部片	長石、海綿骨針	良好	にぶい黄橙：10YR6/3 黄灰色：2.5Y6/1		No1
10	SI01	土師器・小型甕	(14.2)	—	—	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	不良	にぶい赤褐色：5YR4/4 橙褐色：5YR7/6		カマド一括、床下
11	SI01	土師器・小型甕	(10.2)	—	—	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	不良	にぶい橙色：7.5YR6/4 にぶい黄褐色：10YR7/4		カマド一括
12	SI01	土師器・甕	(18.4)	—	—	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	普通	にぶい橙色：7.5YR6/4 にぶい褐色：7.5YR5/4		4区一括
13	SI01	土師器・甕	(20.5)	—	—	内面ヘラナデ	口縁部片		良好	橙褐色：7.5YR6/6		3区一括
14	SI01	土師器・甕	(20.8)	—	—	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	やや不良	橙褐色：5YR6/6		床下、カマド一括、カマド袖、No8
15	SI01	土師器・甕	—	—	—	体部外面ミガキ、内面ヘラナデ	体部下半片	石英、雲母、長石	普通	にぶい橙色：5YR6/4 にぶい褐色：5YR6/6		No7, 9, 床
16	SI01	須恵器・鉢(甔)	(33.7)	—	—	体部外面平行叩き、下半部ヘラケズリ、内面指頭痕、ヘラナデ	口縁部～体部片	石英、雲母、長石	やや不良	灰色：N5/		新治窯跡群 No4, 10, 11, カマド, 床
17	SI01	石製品・砥石	残長 5.1 幅 5.4 厚さ 3.1 重量 96.18g, 凝灰岩									No16
18	SI01	鉄製品・刀子	残長 10.8 幅 0.9 厚さ 0.2 重量 7.47g									No15
19	SI01	鉄製品・クルル鉤カ	残長 8.6 幅 0.55 厚さ 0.4 重量 12.75g 解錠部から軸部への屈曲部カ									No15
20	SI01	鉄製品・不明	残長 3.9 幅 0.55 厚さ 0.35 重量 2.59g									
21	SI01	鉄製品・鎌	長さ 15.3 幅 3.9 厚さ 0.22 重量 56.38g									No3

2号竪穴建物跡 (第10・11・12図, 第4表, 写真図版2・6・7)

位置 調査区東部にある。

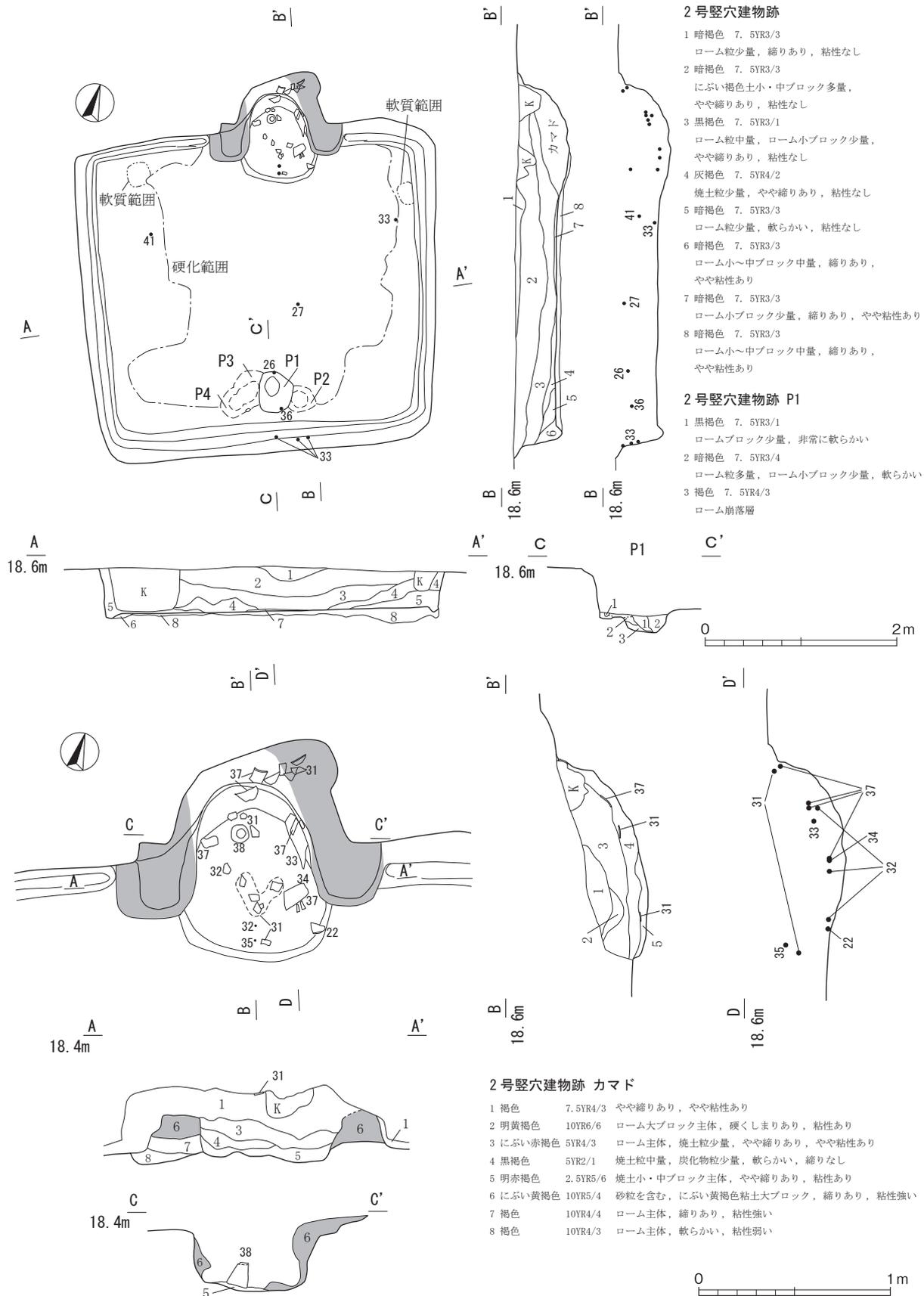
規模と平面形 南北方向 3.21 m, 東西方向 3.47 m のほぼ正方形。

主軸方向 N—24°—W

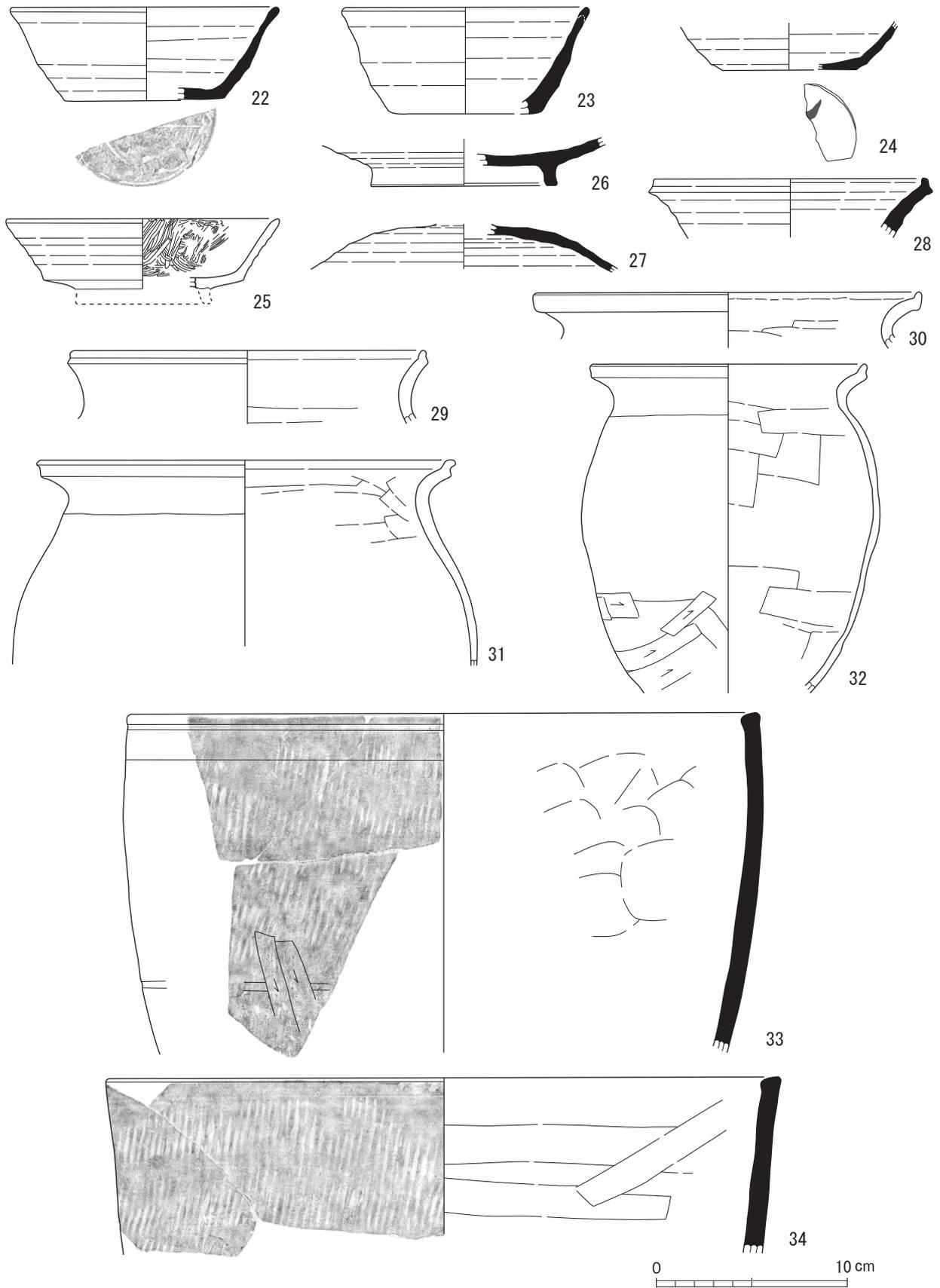
壁 壁は約 36 cm の高さまで残存し、やや外傾しながら立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で、西・南・東壁際を除いて全体に硬化している。壁周溝は、北東部で幅が 5 cm 前後の狭い幅で、それ以外の場所では壁周溝の掘り方幅で確認されている。竪穴建物跡の掘り方は東壁際がやや深く床面から 17 cm 程、西部から中央部は深さ 2～8 cm と浅い。壁周溝の掘り方は、幅約 20 cm 前後、深さ 15 cm 前後である。

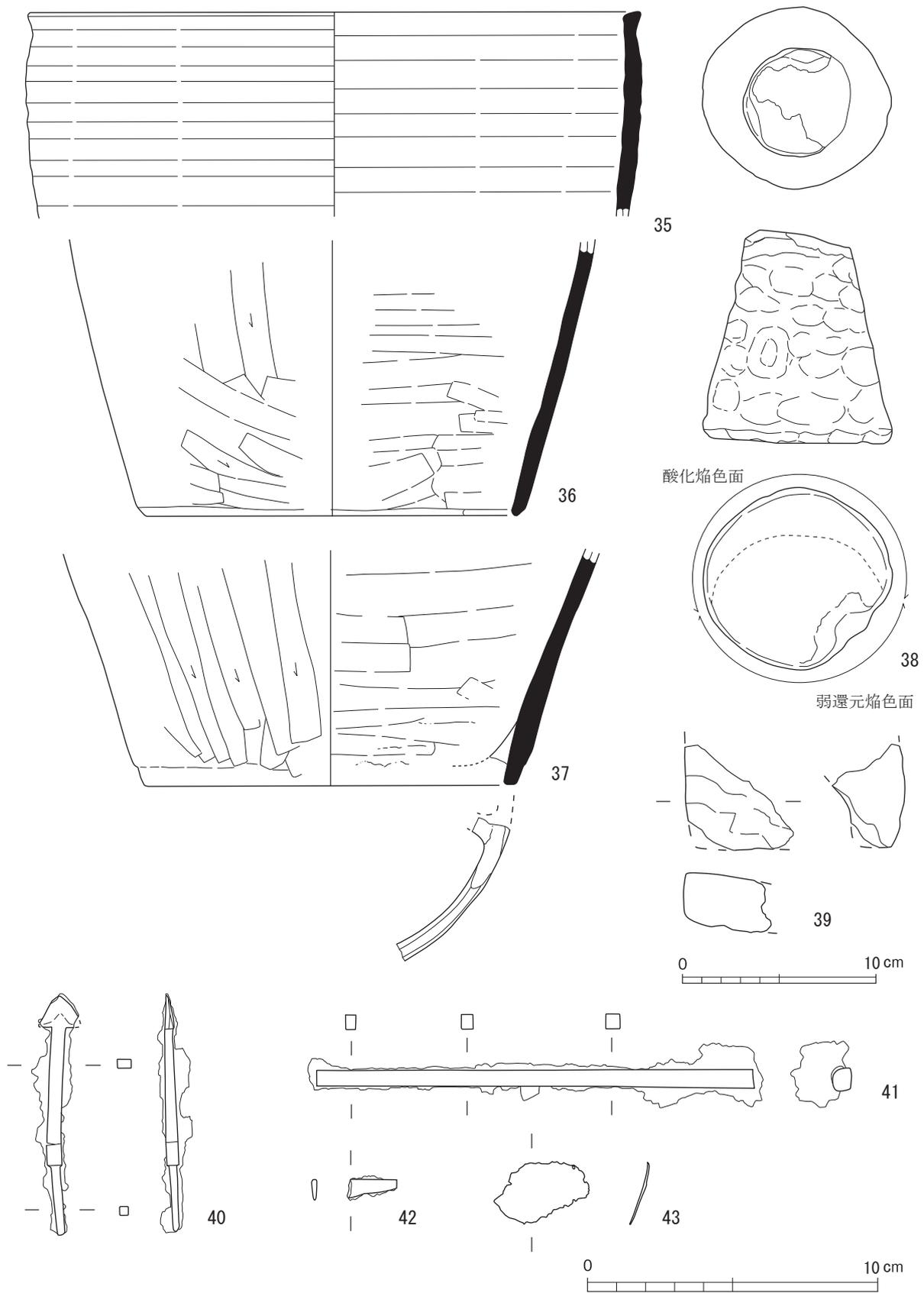
ピット 床面で確認された P1 は、南側壁が傾斜していることから、出入り口ピットと見られる。P2・P3・P4 は床下で確認された。いずれも深さ数 cm の浅い窪みで、性格は不明だが平面的な位置関係からは古い出入り口ピットの可能性も残る。



第10図 2号竪穴建物跡



第11图 2号竖穴建物跡出土遺物(1)



第 12 図 2 号竖穴建物跡出土遺物 (2)

カマド 北壁の中央からやや右に位置し、カマドの中心から左側の北壁幅を1.0とした場合、右側の北壁幅の比率は0.8である。カマドの規模は両袖外側での全幅1.4m、各袖幅は0.40～0.45m、燃烧室の幅は0.62m、焚き口から支脚設置位置までの奥行きは0.67m、燃烧室全体の奥行きは煙道部に向かう傾斜の変換点まで0.95mである。カマドの燃烧室内の中心線から向かって左側に寄った位置に土製支脚が立ったままの状態に残存していた。支脚はカマド左右の北壁を結んだ線よりも約20cm屋外側に設置されていた。カマドの袖部はにぶい黄褐色粘土を主体として構築されている。

覆土 覆土は上層の2層がにぶい褐色土ブロックを多量に含んだ暗褐色土を主体としており、人為的な埋め戻し土層と見られる。下層の4層は焼土粒を含んだ灰褐色土層で、カマドの崩壊に伴う土層である。3層は黒みの強い黒褐色土の腐植土を含んだ土層で、落下した有機質からなる屋根材を主体とする土層の可能性はある。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器、土製品のカマド支脚、砥石、鉄製品の刀子と鉄鏟、不明銅製品が出

第4表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器種	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 注記
			口径	底径	器高							
22	SI02	須恵器・坏	(14.2)	(8.5)	5.0	底部ヘラ切り離し後ナデ、 底部ヘラ記号「一」	40%	海綿骨針、 チャート	普通	灰白色：5Y7/2		23 とほぼ同胎土、 同制作技法 No19, 4区一括
23	SI02	須恵器・坏	(13.0)	(7.8)	5.6	内面に重ね焼きの際の上位 坏底部周縁の溶着痕あり	口縁部～ 底部片	海綿骨針、 チャート	普通	灰白色：5Y7/2		22に同じ 2区一括
24	SI02	須恵器・坏	—	(7.0)	—	底部ヘラ切り離し無調整、 底部墨書	体部下端片	長石、海綿骨針、 チャート	普通	灰色：5Y5/1		2区一括
25	SI02	土師器・ 高台付坏	(14.4)	—	—	内黒・ミガキ	体部片	微砂粒、 金雲母微粒	やや 不良	橙色：7.5YR6/6 黒色：5Y2/1		4区一括
26	SI02	須恵器・盤	—	(9.8)	—	底部回転ヘラケズリ、 ロクロ右回転、内面に径9cm の重ね焼き痕	高台部片	長石、海綿骨針	良好	灰色：7.5Y4/1		No5
27	SI02	須恵器・蓋	—	—	—	天井部回転ヘラケズリ	天井部片	海綿骨針、 チャート	普通	灰色：7.5Y5/1		No4
28	SI02	須恵器・壺	(14.4)	—	—	—	口縁部片	長石、石英	良好	灰色：7.5Y6/1		4区一括
29	SI02	土師器・甕	(18.6)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ	口縁部片	石英、雲母、 長石	良好	にぶい褐色：7.5YR5/4		3区一括
30	SI02	土師器・甕	(20.4)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ	口縁部片	石英、雲母、 長石	良好	橙色：7.5Y6/6		2区一括
31	SI02	土師器・甕	(22.0)	—	—	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	口縁～ 体上半部片	石英、雲母、 長石	やや 不良	明赤褐色：5YR5/8 橙色：7.5Y6/8		No17, 18, 25, 31
32	SI02	土師器・甕	14.6	—	—	体下半部ヘラケズリ、 内面ヘラナデ	40%	石英、雲母、 長石	普通	明赤褐色：5YR5/6 明褐色：7.5YR5/8		No16, 17, 18, 27
33	SI02	須恵器・甕	(33.4)	—	—	体部外面平行叩き後 弱いロクロナデ	口縁部片	長石、海綿骨針、 チャート	不良	にぶい黄褐色：10YR6/3		No2, 7, 8, 9, 23
34	SI02	須恵器・甕	(35.6)	—	—	体部外面平行叩き後 弱いロクロナデ	口縁部片	長石、海綿骨針、 チャート	不良	にぶい黄色：2.5Y6/3 にぶい黄褐色：10Y7/4		No20, 33
35	SI02	須恵器・甕	(32.0)	—	—	体部内外面ロクロナデ	口縁部片	長石、石英、 海綿骨針	やや 不良	にぶい黄褐色：10YR6/4 にぶい黄色：2.5Y6/4		No3
36	SI02	須恵器・甕	—	(19.2)	—	体部外面ヘラケズリ、 内面ヘラナデ	底部片	海綿骨針、 チャート	良好	灰黄色：2.5Y6/2		No6
37	SI02	須恵器・甕	—	(19.2)	—	体部外面ヘラケズリ、内面 ヘラナデ、底部五孔式か	底部片	海綿骨針、 チャート	不良	浅黄色：2.5Y7/4		33か34の 底部片か No20, 21, 24, 26, 29
38	SI02	土製品・支脚	長さ11.1	幅9.8	厚さ8.6			金雲母粒		体部1/2酸化焙焼成色 底面と体部下半の一部は 弱還元色		No32
39	SI02	石製品・砥石	長さ[3.5]	幅[3.6]	厚さ2.1	重量22.86g						凝灰岩 2区一括
40	SI02	鉄製品・鏝	長さ8.4	幅1.5	厚さ0.42	重量6.78g						2区一括
41	SI02	鉄製品・クルル鉤力	長さ15.2	幅0.5	厚さ0.4	重量26.06g						No18
42	SI02	鉄製品・刀子	長さ1.7	幅0.6	厚さ0.2	重量0.57g						覆土
43	SI02	銅製品・不明	長さ[3.3]	幅[2.1]	厚さ0.1	重量2.12g						2区一括

土している。須恵器の器種は坏、盤、蓋、壺、甗があり、土師器は高台付坏と甗がある。遺物の出土状況は、覆土上層中とカマド内覆土、床上から出土しているものに分かれる。22の須恵器坏はカマドの崩壊土に覆われてカマド焚き口部付近から、31・32・33・34・35・37の土師器甗や須恵器甗はカマド内から、38の土製支脚はカマド内から原位置を保った状態で出土している。41の不明鉄製品は断面が正〜長方形の角棒状の製品で、カマド覆土からの出土である。

3号竪穴建物跡 (第13・14・15図, 第5表, 写真図版2・7)

位置 調査区の中央部にある。

規模と平面形 南北方向4.37m, 東西方向2.92mの南北方向に長い長方形。

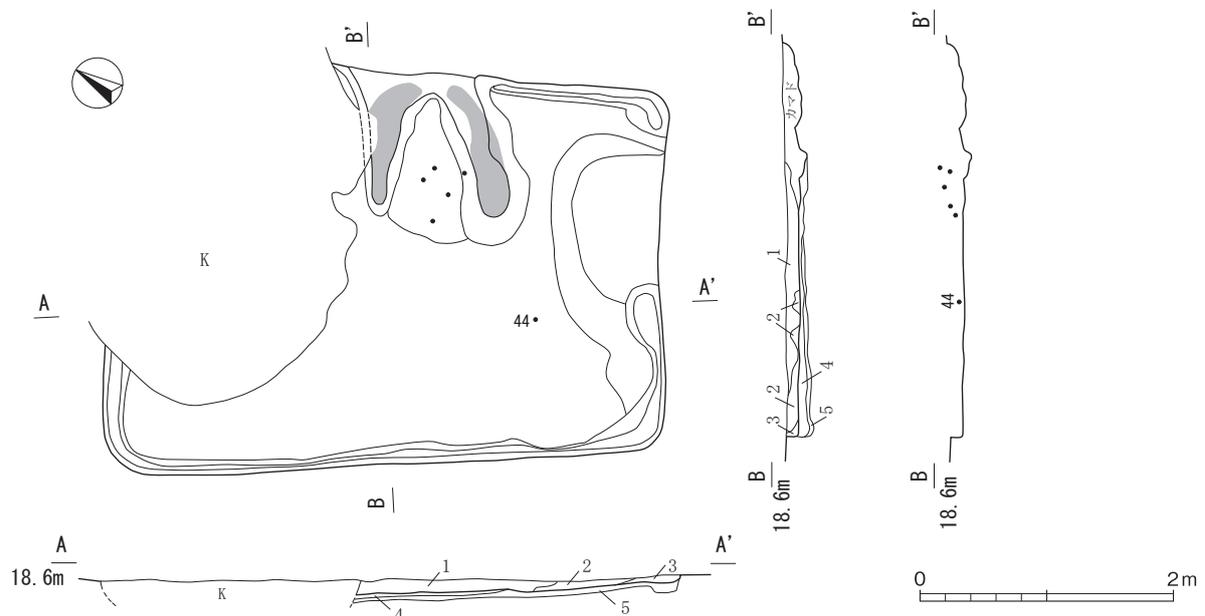
主軸方向 N-54°-E

壁 壁は約10cmの高さまで残存している。

床 床面は南壁際の出入り口部と見られる約8cmの高まり部がある以外、ほぼ平坦で全体にやや硬化している。北壁から東壁の北部にかけて攪乱によって床面が壊されている。床面周囲の壁周溝は幅10cm前後、深さ5cm前後で、南壁東寄り切れている。

ピット 支柱穴はない。カマドに向かって右袖と竪穴東壁との間に、甗などの容器を安定的に置くためではないかと考えられる円い痕跡を複数観察したが、ごく浅く不明瞭なためピットと認定するに至らなかった。

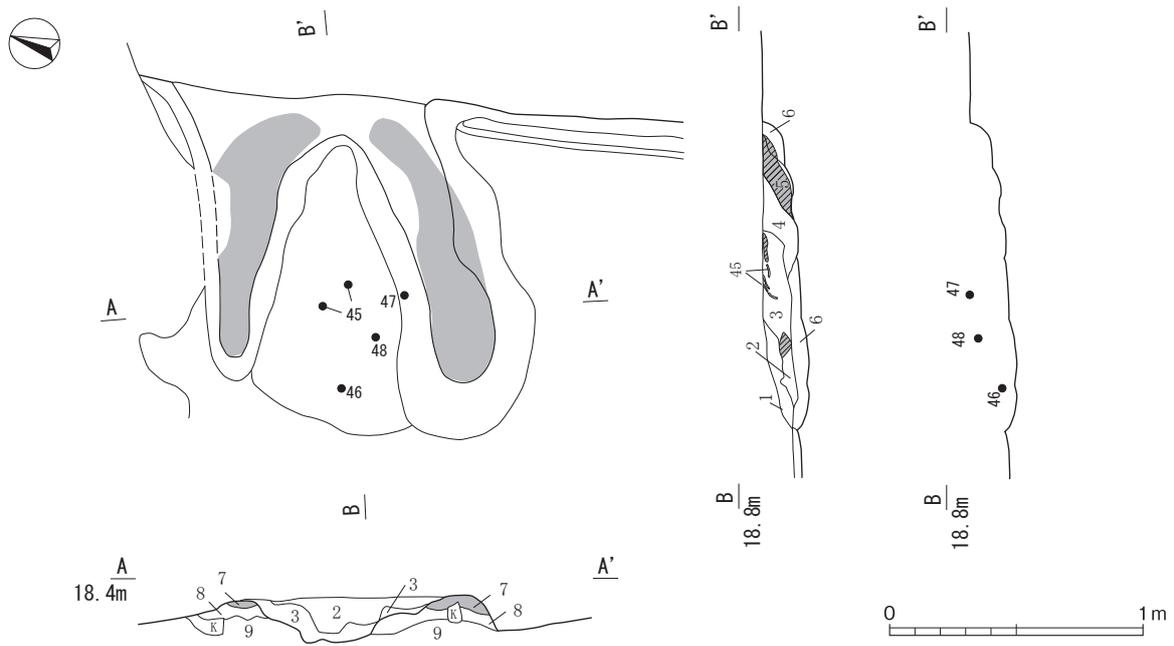
カマド 東壁の中央に位置する。奥壁は東壁に接し、袖部は屋内に設けられている。全幅1.3m, 袖の長さ1.3m, 燃烧室の幅は0.6mで、袖部の構築土として小礫を多く含んだ褐色粘土を使用している。



3号竪穴建物跡

- | | | | |
|----------------|--------------------------------------|----------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 7.5YR3/1 | ローム粒少量, 締りあり, 粘性弱い | 4 暗褐色 7.5YR3/3 | ローム小・中ブロック少量, 締りあり, 粘性なし |
| 2 暗褐色 7.5YR3/3 | ローム粒少量, 粘性土小・中ブロック, 少量, 締りあり, やや粘性あり | 5 褐色 7.5YR4/3 | ローム小〜大ブロック主体, 締りあり, やや粘性あり |
| 3 褐色 7.5YR4/3 | ローム粒少量, やや軟らかい, 粘性なし | | |

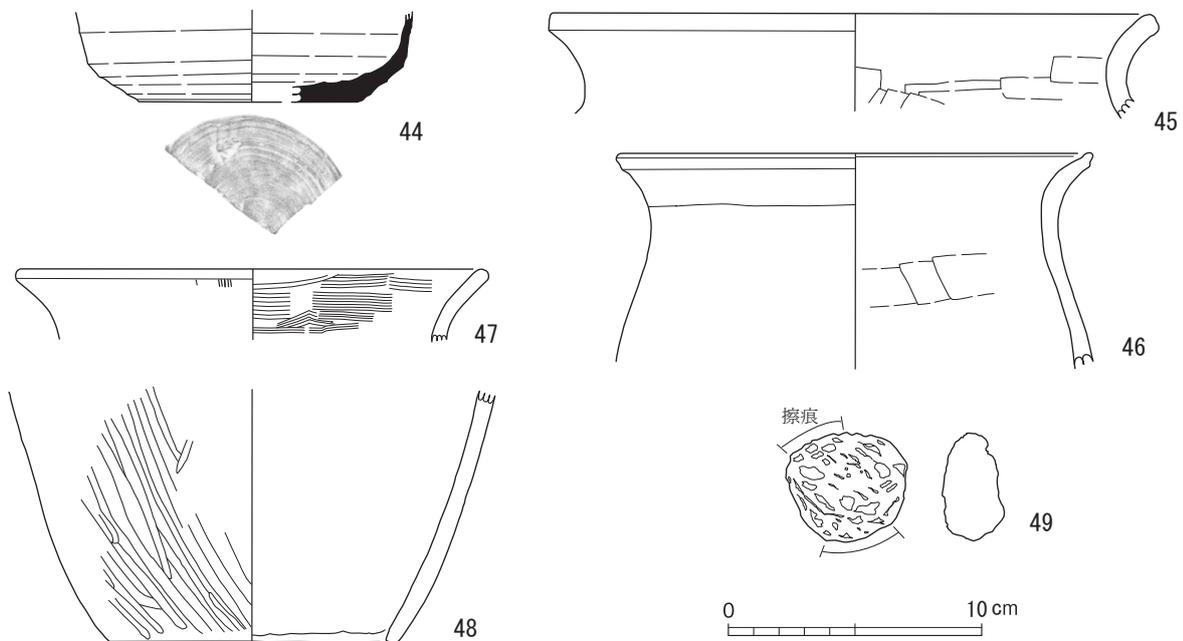
第13図 3号竪穴建物跡



3号竪穴建物跡 カマド

1 黒褐色	5YR5/2	焼土小・中ブロック中～多量, 縮りあり, 粘性弱い	6 暗赤褐色	5YR3/4	ローム主体, 被熱層, 縮りあり, 粘性弱い
2 にぶい赤褐色	5YR5/4	焼土粒・焼土大ブロック・粘土粒, 縮りあり, やや粘性り	7 にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色粘土小～大ブロック主体, 小礫, 縮りあり, 粘性あり
3 明赤褐色	2.5YR5/8	焼土小～大ブロック・土師器破片多量, 縮りあり, やや粘性あり	8 にぶい赤褐色	5YR4/3	ソフトローム小・中ブロック主体, やや軟らかい, 粘性なし
4 暗赤褐色	5YR3/3	焼土小ブロック少量, 黒色土小～中ブロック少量, 炭化物含む灰層	9 暗赤褐色	5YR3/4	被熱ローム, 縮りあり, やや粘性あり
5 にぶい赤褐色	5YR4/3	焼土小ブロック多量, 縮りあり, 粘性なし			

第14図 3号竪穴建物跡カマド



第15図 3号竪穴建物跡出土遺物

第5表 3号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器種	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考 注記
			口径	底径	器高						
44	SI03	須恵器・坏	—	(8.6)	—	底部回転ヘラケズリ、 ロクロ左回転	25%	長石、チャート、 海綿骨針	やや不良	灰白色：5Y7/2	No12
45	SI03	土師器・甕	(24.0)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ、 体部内面ヘラナデ	口縁部片	長石、石英、雲母	良好	橙色：7.5YR6/8	No5, 13
46	SI03	土師器・甕	(18.8)	—	—	体部外面ナデ、内面ヘラナデ	口縁部片	石英、海綿骨針	普通	灰黄褐色：10YR4/2	No7
47	SI03	土師器・甕	(18.8)	—	—	口縁部内面横位ハケメ、 外面縦方向のハケメ後ヨコナデ	口縁部片	雲母	良好	にぶい黄褐色：10YR7/3	No9
48	SI03	土師器・甕	—	(11.6)	—	体部外面ミガキ、内面剥離	体下半部片	長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色：7.5YR6/4	No8
49	SI03	石製品・軽石	長さ4.8	幅4.3	高さ2.4	重量12.07g	側縁部に擦痕が2カ所あり			3区覆土	

覆土 覆土は厚さ約10cm残存し、締まりのある黒褐色土を主体としている。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器、磨痕の見られる小型の軽石が出土している。須恵器は床上から44の坏が、土師器はカマド覆土から45・46・47の甕、48の甗が出土している。44の須恵器は、静岡県湖西窯では碗とされている（鈴木2000）が、同器形の遺物が茨城県内資料では明確でないので、ここでは坏としておく。

4号竪穴建物跡（第16・17図，第6表，写真図版6・7）

位置 調査区南西部にある。

規模と平面形 南北方向は東壁側2.54m，西壁側2.78m，東西方向は2.54mで，西半分がやや南北に長い方形。

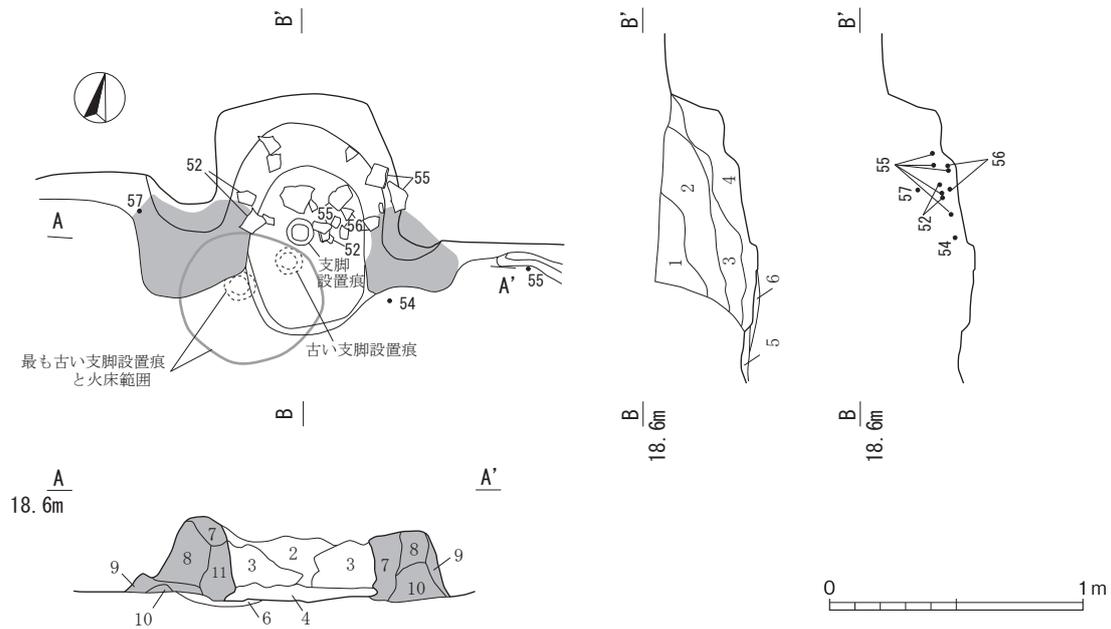
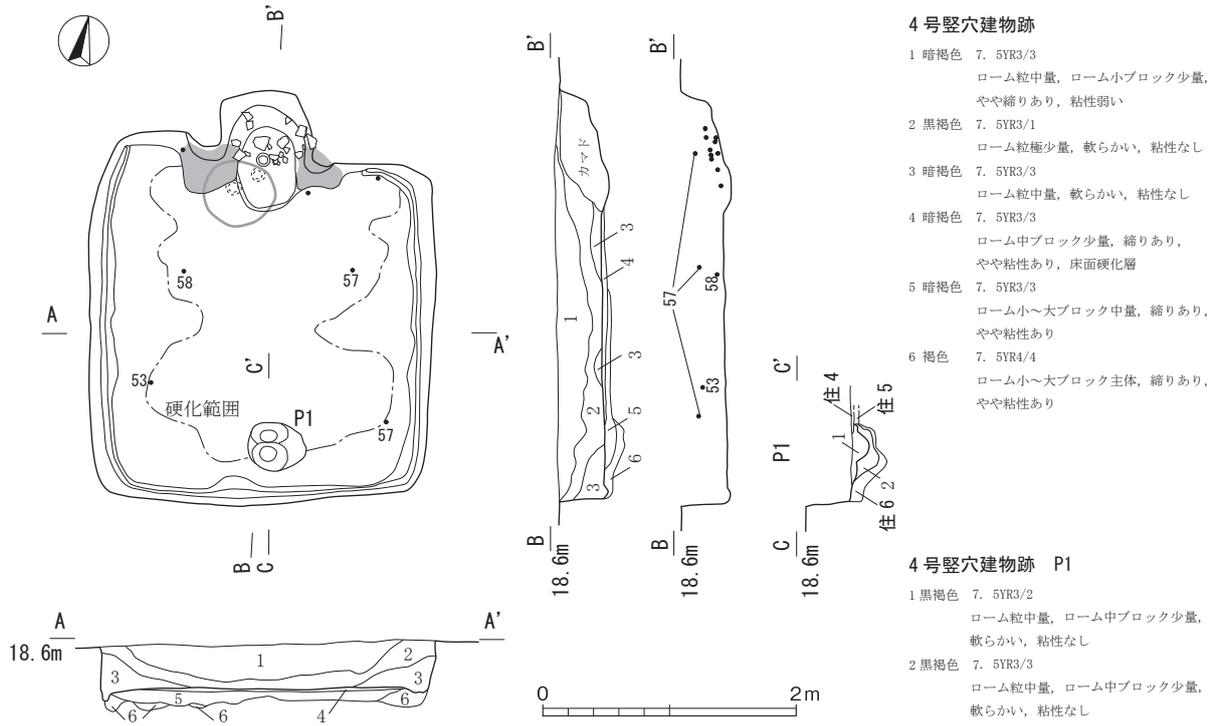
主軸方向 N—12°—W

壁 壁は約35cmの高さまで残存し，ほぼ垂直に立ち上がる。

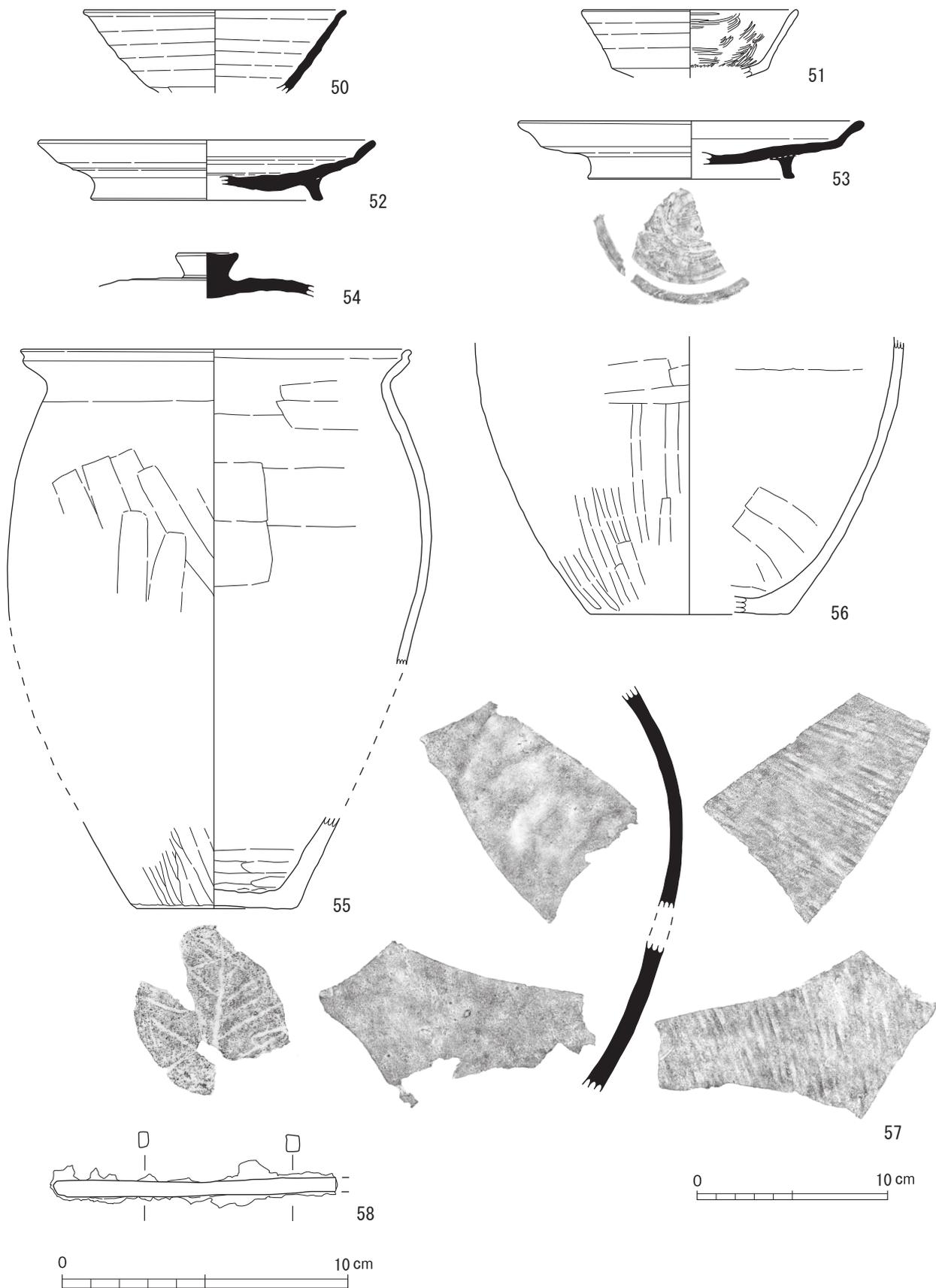
床 床面はほぼ平坦で，カマド前面からP1まで竪穴中央部が硬化している。床面は2時期あり，最終床面である4層上面は厚さ2～3cmの暗褐色土が古い床面の中央部に載せられて構築されている。次いで古い床面である5層上面もよく硬化していた。床面周囲の壁周溝は，幅約5～10cmで確認された。壁周溝の掘り方幅は約16cmで重複は見られないので，床の補修に伴う大がかりな竪穴の改築がないのか，最終の床面構築時に再度掘削しているのかのどちらかと思われる。竪穴建物跡の掘り方は中央部がやや高く床面から3cm程の深さ，床面の壁寄りには10cm前後の深さで最深部は15cm程である。

ピット 支柱穴はない。P1は出入りロピットで下端が2箇所確認されている。北側の浅い方（P1土層断面図の1層）が新しく，南側壁寄りの深い部分の落ち込み（同2層）が古い出入り口材（木製梯子）の痕跡と見られる。

カマド 北壁のほぼ中央にある。カマドの幅は1.17m，燃焼室幅は0.64m，両袖部とも，にぶい黄橙色粘土を主体として，内側ににぶい褐色粘土を貼り付けて構築している。燃焼室中央部には，支脚の設置痕と見られる堆積土の色調に差のある部分を確認された。支脚設置痕はカマド左右の北壁を結んだ線よりも約6cm屋外側に位置する。カマドの左側の北壁は10cmほど屋外側にあるので，カマド両袖の始まりは左右でずれているものの，残存状況が悪いため，袖の先端位置がずれているかどうかは確認でき



第 16 図 4号竪穴建物跡



第 17 图 4 号竖穴建物跡出土遺物

第 6 表 4 号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器種	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 注記
			口径	底径	器高							
50	SI04	須恵器・坏	(13.8)	—	—	体部内面ロクロ目は外面に較べて弱い	40%	長石, 石英, 海綿骨針	普通	灰オリーブ色: 5Y6/2		1-4 区一括
51	SI04	土師器・高台付坏	(11.4)	—	—	内面黒色処理, ミガキ	30%	微砂粒	普通	灰黄褐色: 10Yr5/2 黒色: 10YR2/1		4 区一括
52	SI04	須恵器・盤	(17.8)	(12.2)	3.2	—	30%	石英, チャート, 海綿骨針	やや不良	灰黄色: 2.5Y7/2		No10, 17
53	SI04	須恵器・盤	(18.2)	(10.9)	3.1	—	40%	石英, 海綿骨針	良好	灰黄色: 2.5Y7/2 灰色: 5Y6/1		No5
54	SI04	須恵器・蓋	—	—	—	—	25%	海綿骨針	良好	灰色: 5Y6/1		No6
55	SI04	土師器・甕	20.4	8.4	—	体上半部ヘラナデ, 下半部ヘラミガキ, 底部木葉痕	体上半部 底部片	長石, 石英	普通	にぶい赤褐色: 5YR5/4		No1, 9, 10, 17, 20, 21
56	SI04	土師器・甕	—	(10.4)	—	体部外面ヘラナデ, 内面ヘラナデ, 底面指ナデ	体下半部 ~底部片	石英微粒	普通	にぶい黄褐色: 10YR5/4		4 区一括 No11, 20
57	SI04	須恵器・甕	—	—	—	体部外面平行叩き, 内面掌圧痕	体部片	海綿骨針, 長石, チャート	良好	灰色: 5Y4/1		No2, 3, 15
58	SI04	鉄製品・クルル鉤カ	長さ [9.8]	幅 0.5	厚さ 0.4	重量 7.98g	解錠部カ					No7

ない。床面の掘り下げによって、支脚設置痕のすぐ南西に一段階古い支脚設置痕が灰層下のカマド基部に見つかった。さらに、カマドの南西側 30 cm 程のところに、焼土化した古い火床とそれに伴う最も古い支脚設置痕が確認された。

覆土 覆土は厚さ約 36 cm 残存し、1～3 層に分層した。3 層は住居廃絶直後に壁際に堆積した初期堆積の暗褐色土層、2 層は厚さ 10 cm 程の黒褐色土で 3 層を直接被覆している部分も床面を被覆している部分も同じような厚さで堆積している。外壁がなくなった後の自然流入土層としては厚さが均一であるため、有機質を含む屋根材の落下層の可能性が考えられる。1 層はローム小ブロックを多く含む暗褐色土で人為的な埋め戻し土層と見られる。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器、角棒を折り曲げた器種不明の鉄製品が出土している。須恵器の器種は坏、盤、蓋、甕があり、土師器は内黒高台付坏と甕がある。55 の土師器甕、52 の須恵器盤はカマド覆土から、54 の須恵器蓋はカマド右袖下から出土している。50 の須恵器坏や 53 の須恵器盤は覆土からの出土である。57 の須恵器甕は竪穴覆土からカマドまでの範囲に広く散らばっていた。

5 号竪穴建物跡 (第 18・19・20・21 図, 第 7 表, 写真図版 3・8・9)

位置 調査区西部にある。

規模と平面形 南北方向 2.56 m, 東西方向 2.51 m のほぼ正方形。

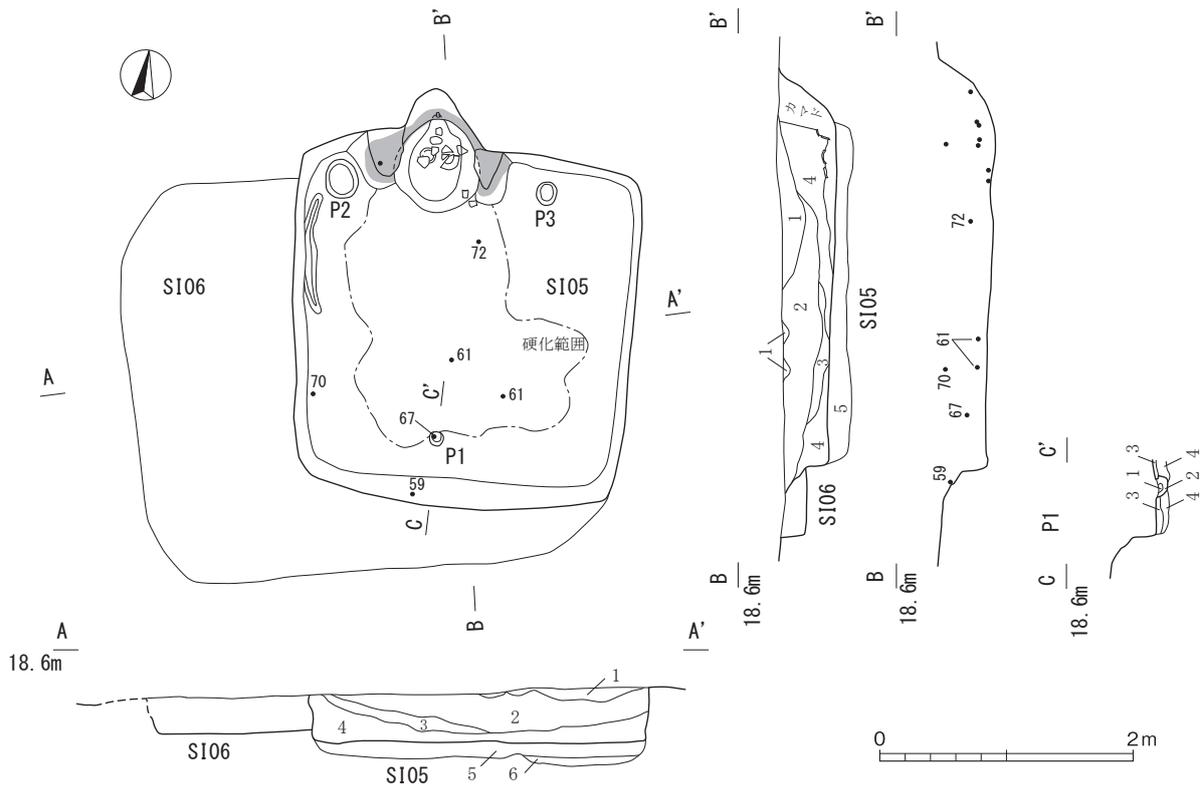
重複関係 6 号竪穴建物跡を切っている。

主軸方向 N—5°—W

壁 壁は約 40 cm の高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で、北東部を除いた住居の中央部付近が硬化している。壁周溝は北西部で一部確認できた。掘り方では四隅にも壁周溝があるように見えるが、床面では確認できなかった。竪穴建物跡の掘り方はカマド前面の住居中央部付近がやや深く、床面から深さ 13 cm 程である。竪穴南東隅には底面が平らで平面形が長方形、深さ 17cm の床下土坑と見られる独立した掘り方が見られた。

ピット カマドの対面の南壁と床硬化面との境で確認された P1 は深さ約 10 cm で、南側壁が傾斜しており出入り口ピットと見られる。P2 と P3 は深さ 2～3 cm のごく浅い窪みで、柱穴ではなく、甕などの容



5号竪穴建物跡

- 1 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒小～中量，ローム中・大ブロック少量，締りあり，粘性なし
- 2 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒多量，ローム小・中ブロック中量，締りあり，粘性なし
- 3 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒少量，ローム小・中ブロック少量，締りあり，粘性なし
- 4 暗褐色 7.5YR3/3 ローム粒極少量，ローム小ブロック少量，締りあり，粘性弱い
- 5 褐色 7.5YR4/3 ローム小～大ブロック多，締りあり，やや粘性あり
- 6 褐色 7.5YR4/3 ローム小～大ブロック主体，締りあり，やや粘性あり

5号竪穴建物跡 P1

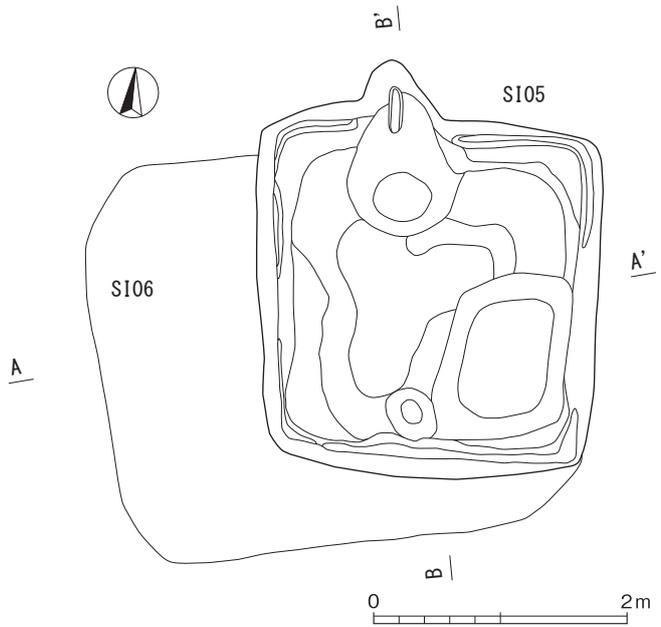
- 1 暗褐色 7.5YR3/4 ローム粒少量，軟らかい，粘性なし
- 2 暗褐色 7.5YR3/4 ローム小ブロック少量，締りあり，やや粘性あり
- 3 暗褐色 7.5YR3/4 ローム粒・ローム小ブロック多量，締りあり，粘性あり
- 4 暗褐色 7.5YR3/4 ローム粒中量，ローム小ブロック多量，締りあり，粘性あり

第18図 5号竪穴建物跡

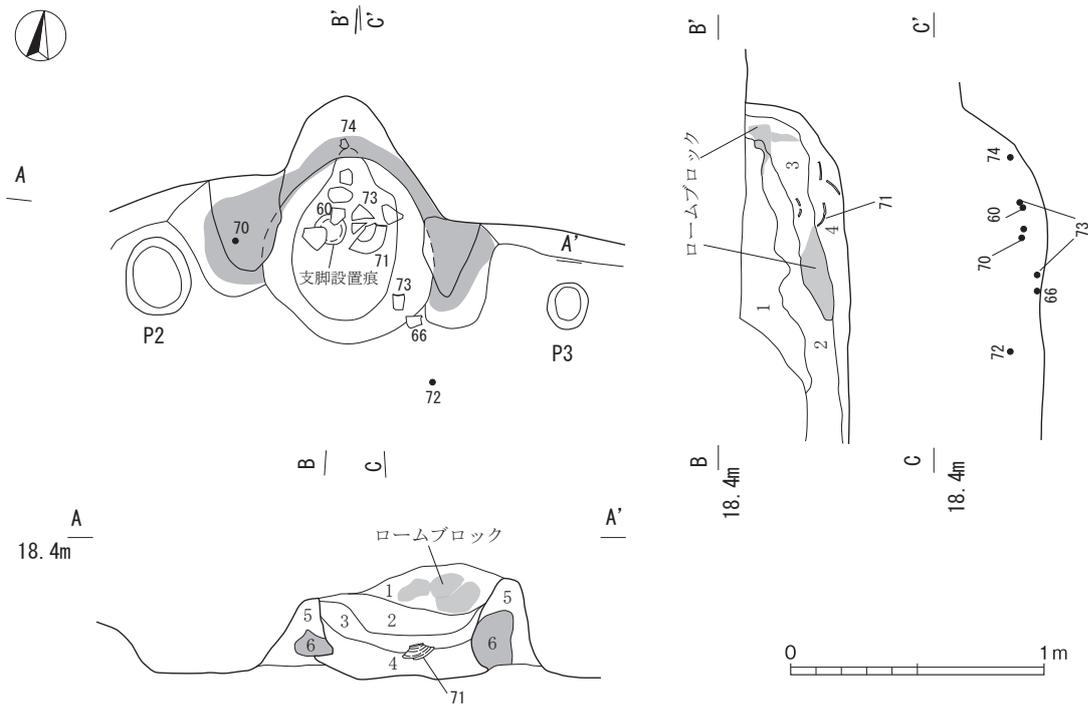
器を置いていた痕跡と見られる。

カマド 北壁の中央からやや左に偏寄った位置にあり，カマドの中心から右側の北壁幅を1.0とした場合，左側の北壁幅の比率は0.62である。規模は両袖外側での全幅1.2m，各袖幅は0.30m前後，燃烧室の幅は0.67m，焚き口から支脚設置痕までの奥行きは0.47m，燃烧室全体の奥行きは煙道部に向かう傾斜の変換点までで0.80mである。カマド燃烧室の支脚痕は，カマド左右の北壁を結ぶ線上に位置している。カマドの袖部にはぶい橙色粘土を基部とし，粘土を多量に含む褐色土で構築されている。

覆土 覆土は4層で，1～3層は全体にロー



第19図 5号竪穴建物跡掘り方



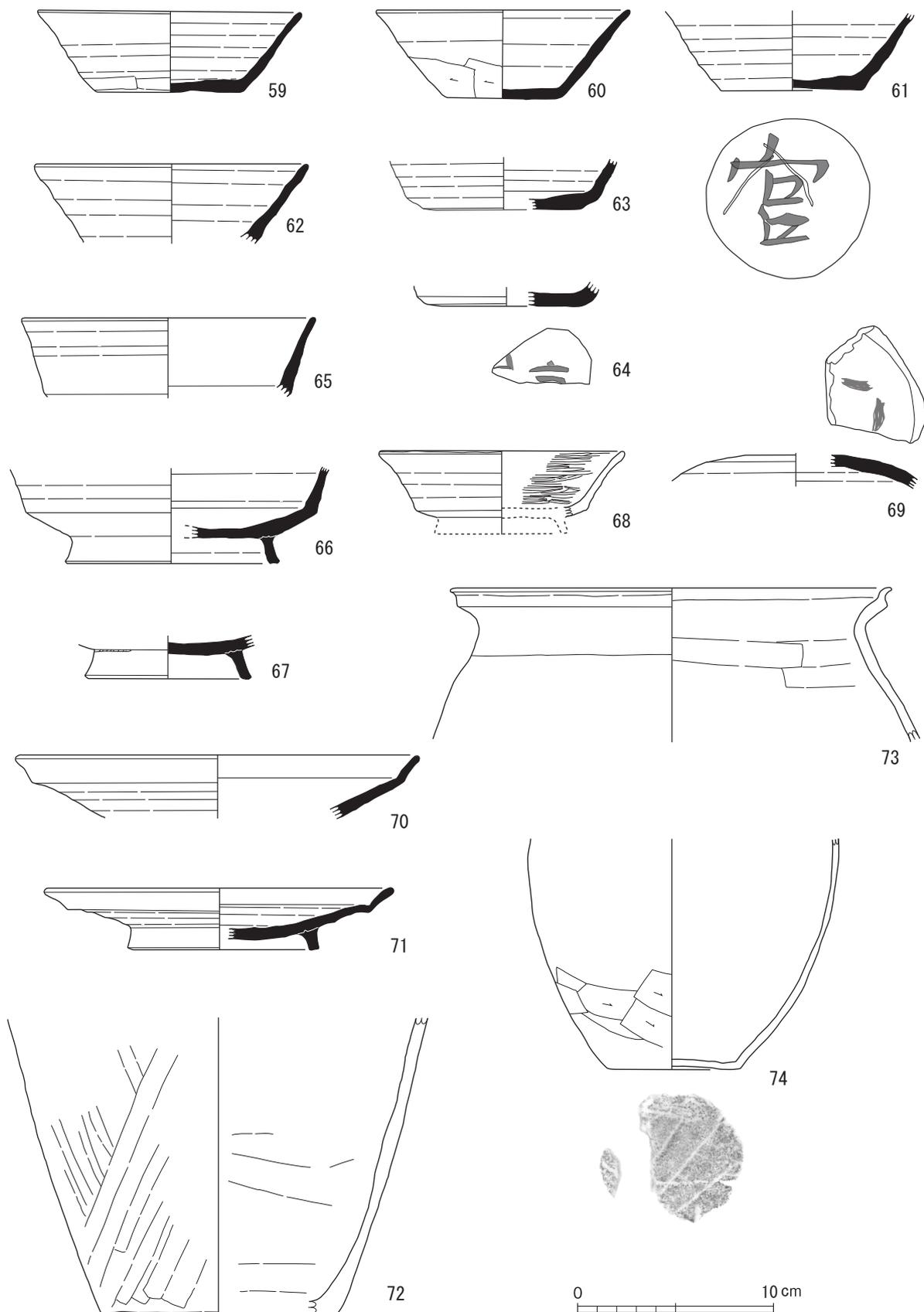
5号竪穴建物跡 カマド

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1 灰褐色 7.5YR6/2 灰褐色粘土小・中ブロック主体、ローム小ブロック多量、締りあり、粘性あり | 4 黒褐色 7.5YR3/1 炭化物粒多量、軟らかい、粘性なし |
| 2 褐色 7.5YR4/3 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、粘土粒多量、やや軟らかい、やや粘性あり | 5 褐色 7.5YR4/3 粘土粒・粘土小ブロック多量、締りあり |
| 3 灰褐色 7.5YR6/2 粘土中・大ブロック多量、土器片多量、粘土粒多量、やや軟らかい、粘性あり | 6 にぶい橙色 7.5YR7/3 粘土ブロック多量、締りあり、粘性あり |

第20図 5号竪穴建物跡カマド

ムブロックをある程度含んだ黒褐色土を主体としている。下層の4層はロームブロックを含まない暗褐色土の自然堆積層と見られる。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器が出土している。須恵器は坏，高台付坏，盤，蓋があり，土師器は高台付坏と甕がある。遺物の出土状況は，覆土から出土しているものと，カマド内覆土から出土しているものに分かれる。60・62の須恵器坏，66の須恵器高台付坏，70・71の須恵器盤68の土師器高台付坏，73・74の土師器甕はカマドの覆土から，59・61・63の須恵器坏，65・67の須恵器高台付坏，69の須恵器蓋，64の須恵器坏，72の土師器甕は覆土から出土している。59の坏は体部下端を手持ちヘラケズリした，雲母を含む新治窯跡群産の須恵器である。内外底面に煤の付着があり，灯明皿用途と考えられる。口縁部に3か所の欠損があるが，その部分に灯芯が接触することで過度に被熱し，器体の劣化を招いた可能性がある。60の須恵器坏も新治窯跡群産で底径が小さく，体部下端の手持ちヘラケズリの幅が広く，全体に酸化焙焼成で一部にカマド粘土の付着がある。63の須恵器坏底部片は二次底部面を持っており，古い土器の混入と思われる。61の須恵器坏は海綿骨針を含む木葉下窯跡群産の須恵器で，底部外面には，「宮」の墨書文字とヘラ記号が見られる。なお，調査の初期の覆土掘り込みに際して，5号竪穴建物跡の3区と4区は6号竪穴建物跡の覆土と同時に掘り込んでいるため，3・4区一括として取り上げられた遺物の中には，6号竪穴建物の覆土に帰属する可能性のあるものを含む。63・64の須恵器坏底部片と69の須恵器蓋，59の坏，65・66の高台付坏はその可能性が考えられる。



第 21 图 5 号竖穴建物跡出土遺物

第7表 5号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 注記
			口径	底径	器高							
59	SI05	須恵器・坏	13.3	7.3	4.2	底部多方向ヘラケズリ, 口縁部に欠け2箇所, 内底面に煤付着	80%	雲母	不良	灰黄色: 2.5Y7/2		燈明皿カ? 新治窯跡群 No5
60	SI05	須恵器・坏	12.8	5.9	4.6	体部下半手持ちヘラケズリ, 底部多方向ヘラケズリ	80%	雲母, 長石, 石英	やや 不良	灰褐色: 7.5YR4/2		新治窯跡群 No9
61	SI05	須恵器・坏	—	7.0	—	底部回転ヘラ切り離し無調整, 弱いヘラ記号, 墨書文字「宮」	50%	長石, 海綿骨針	普通	灰黄色: 2.5Y6/2		No2, 3
62	SI05	須恵器・坏	(14.0)	—	—	ロクロ右回転	30%	長石, チャート, 海綿骨針	普通	灰黄褐色: 10YR5/2		カマド
63	SI05	須恵器・坏	—	—	—	底部回転ヘラ切り離し, 無調整	底部片	長石	普通	灰黄色: 2.5Y6/2		一括
64	SI05	須恵器・坏	—	(8.0)	—	体部下端回転ヘラケズリ, 底部ヘラナデ, 墨書	底部片	長石, チャート, 海綿骨針	良好	灰色: 5Y5/1		3区一括
65	SI05	須恵器・高台付坏	(15.0)	—	—	—	口縁部片	長石, チャート, 海綿骨針	普通	灰色: 5Y5/1 灰色: N5/		2区一括
66	SI05	須恵器・高台付坏	—	(11.0)	—	体部下端・底部回転ヘラケズリ, ロクロみぎ回転。	30%	長石, チャート, 海綿骨針	良好	灰黄色: 2.5Y6/2		No14
67	SI05	須恵器・高台付坏	—	—	—	体部下端回転ヘラケズリ, 内面黒色処理・ミガキ	口縁部片	石英微粒	良好	暗灰黄色: 2.5Y5/2		No4
68	SI05	土師器・高台付坏	(12.6)	—	—	体部下端回転ヘラケズリ, 内面黒色処理・ミガキ	口縁部片	石英微粒	良好	にぶい黄褐色: 7.5YR7/4 黒色: 5Y2/1		カマド一括
69	SI05	須恵器・蓋	—	—	—	天井部上面に墨書	天井部片	石英, 雲母微粒	やや 不良	にぶい黄褐色: 10YR6/3		新治窯群 3区一括
70	SI05	須恵器・盤	20.6	—	—	—	30%	長石, チャート, 海綿骨針	普通	黄灰色: 2.5Y5/1		No7, 18
71	SI05	須恵器・盤	(17.8)	9.8	3.3	内面使用による擦痕, ロクロ右回転	50%	長石, チャート, 海綿骨針	普通	暗灰色: 2.5Y5/2		No12
72	SI05	土師器・甕	—	(12.0)	—	体部外面ヘラナデ, 内面ヘラナデ	体下半部片	長石, 石英, 雲母	普通	にぶい黄褐色: 10YR4/3		No1, カマド 1層
73	SI05	土師器・甕	(22.5)	—	—	体部外面ナデ, 内面ヘラナデ	口縁部片	長石・石英・雲母	普通	にぶい赤褐色: 5YR4/4		No11, 13, 15, カマド3層
74	SI05	土師器・甕	—	6.7	—	体部外面ナデ, 下半部ヘラケズリ 内面ナデ, 底部木葉痕。 体部中位粘土付着	体下半部	石英	普通	明褐色 7.5YR5/6		No17, カマド3層

6号竪穴建物跡 (第22・23図, 第8表, 写真図版3・9)

位置 調査区西部にある。

規模と平面形 南北方向3.03m, 東西方向(3.60)mの東西に長い長方形。

重複関係 5号竪穴建物跡に切られており, 住居北東部とカマドは確認できない。

主軸方向 N-13°-W

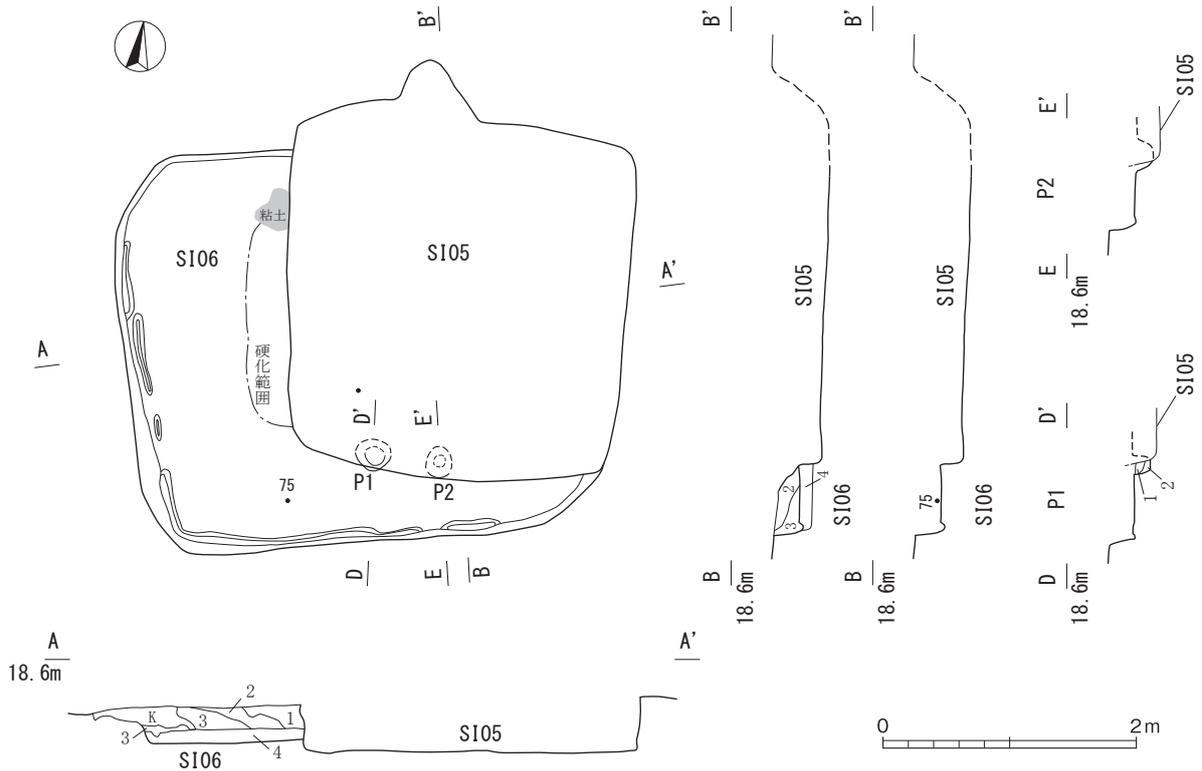
壁 壁は約18cmの高さまで残存し, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で, 西壁と南壁から約1m弱の範囲を除いた中央部分が硬化している。壁周溝は, 北壁直下から北西隅部までは確認できず西壁から南壁側には幅10cm前後の狭い幅で確認されている。

ピット 南壁から0.6~0.7m離れて5号竪穴建物南壁に切られる位置で2基確認されている。P1は床面精査で確認され, P2はほとんど切られていたが床下の深さに痕跡が残っていた。いずれも出入口口ピットと思われる。

カマド 5号竪穴建物跡に壊されて存在していないが, 北西部の床面に崩れた灰褐色粘土ブロックの堆積が見られ, カマドで使用されていた粘土の崩落ブロックと見られる。

覆土 覆土は3層に分かれる。各層とも壁際から順次住居中央部に向かって傾斜して堆積しており, 流



6号堅穴建物跡

- 1 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒少量, ローム小ブロック少量, 締りあり, 粘性なし
- 2 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒少量, ローム小ブロック極少量, 締りあり, 粘性なし
- 3 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒少量, 締りあり, 粘性なし
- 4 暗褐色 7.5YR3/3 ローム小・中ブロック多量, 締りあり

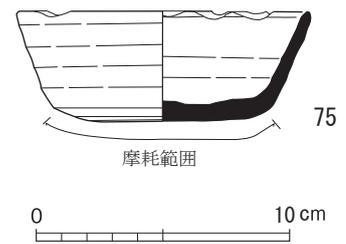
6号堅穴建物跡 P1

- 1 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒中量, 締りあり, 粘性なし
- 2 褐色 7.5YR4/3 ローム主体, ローム小ブロック少量, 締りあり, やや粘性あり

第22図 6号堅穴建物跡

れ込んだ先端は床面を直接覆っている。色調に差があるがロームのブロックの含有は少なく自然堆積土層と考えられる。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器であるが、調査の初期に5号堅穴と6号堅穴建物を同時に掘り込んでいるため、覆土から一括で取り上げた破片遺物については5号堅穴建物内で掲載している（第20図）。6号堅穴建物跡に伴うことが確実なのは75の須恵器坏で、南壁寄りの床面付近から出土している。ほぼ完形で、口縁部には小さな欠けが11箇所見られ底部は磨り痕が著しい。口縁部を下にして、坏底部外面を硯の磨り面のように、何らかのものを磨る目的で使用したことが想像される。



第23図 6号堅穴建物跡出土遺物

第8表 6号堅穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考 注記
			口径	底径	器高						
75	S106	須恵器・坏	11.6	7.6	4.4	底部回転ヘラケズリ, ロクロ右回転, 口縁部に欠け11か所, 外底面磨り痕著しい	ほぼ完形	チャート, 海綿骨針, 長石	普通	灰白色: 10YR7/1	口縁部に11か所の欠け No1

7号竪穴建物跡（第24・25図，第9表，写真図版4・9）

位置 調査区北西部の調査区ラインを跨ぐ位置にあり，竪穴の西側大部分は調査区外にある。

規模と平面形 南北方向3.20 m，東西方向1.22 m以上。

主軸方向 N—87°—E

壁 壁は約30 cmの高さまで残存し，ほぼ垂直に立ち上がる。

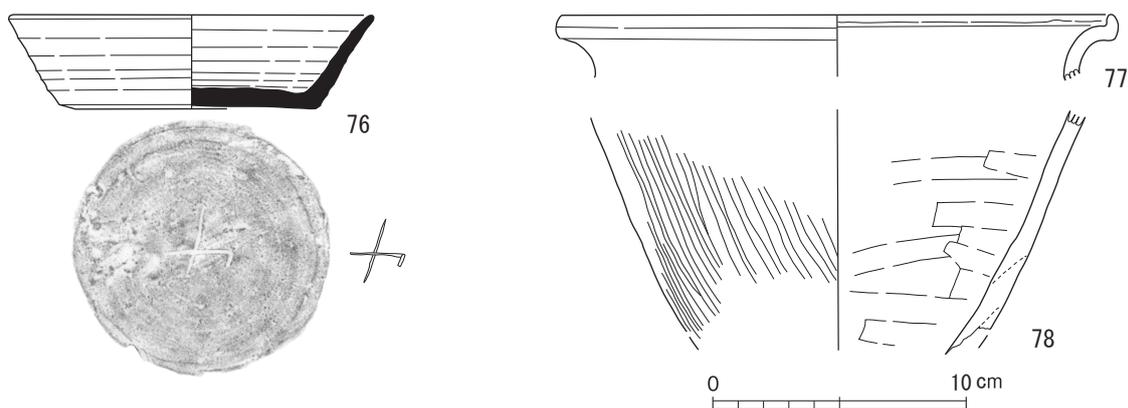
床 床面はほぼ平坦で，北東隅部の浅い窪み穴の部分を除いて全体的に硬化している。壁周溝は，北東隅部以外で幅が10 cm前後で確認されている。竪穴建物跡の掘り方は，土層断面で見ると2層になっており，下層の掘り方は竪穴建物の中心から30cm程南に寄り，段差となっている。掘り方は中央部が深く南北の壁方向に向かって緩やかに浅くなる。

ピット 床面で確認されたP1は，床面の硬化部から外れた位置にあり非常に浅い円形の窪み穴である。柱穴というよりは，甕などの容器の設置痕跡の可能性が高い。

カマド 東壁の中央からやや南に寄った位置にあり，カマドの中心から左側の東壁幅を1.0とした場合，右側の東壁幅の比率は0.72である。規模は両袖外側での全幅1.0 m，各袖幅は0.30から0.32 m，燃烧室の幅は0.45 mで袖部にはにぶい褐色粘土を使用している。左袖部を構築する粘土のブロック内にほぼ完形の須恵器坏（76）が埋め込まれている。

覆土 この地点では現代の盛り土層の下に1～4層に分かれる黒褐色土が堆積し，その下の5層上面が遺構確認面で，6～10層が遺構覆土，11・12層が掘り方内充填土層となっている。5層はローム小ブロックや炭化物を含んだ埋め戻し土層と見られる。

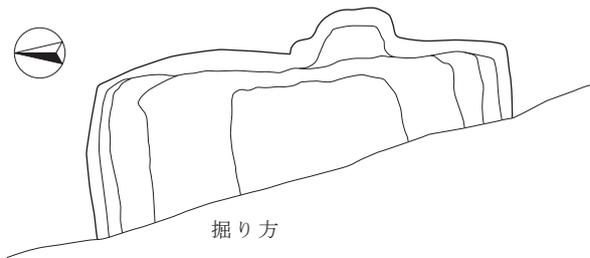
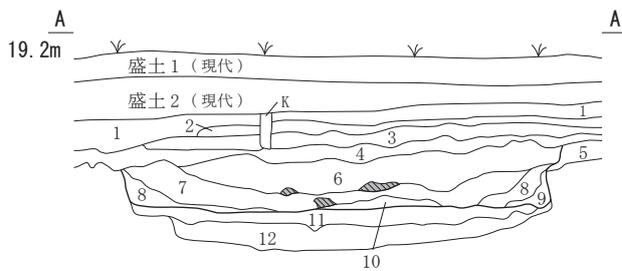
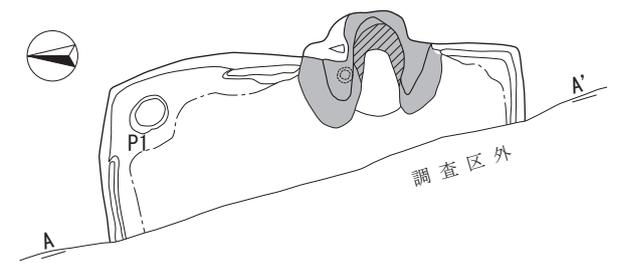
遺物 出土遺物は須恵器と土師器があり，須恵器は坏，土師器は甕がある。77の土師器甕は覆土から，78の甕はカマド覆土から，76の須恵器坏は袖部を構築する粘土内から出土している。



第24図 7号竪穴建物跡出土遺物

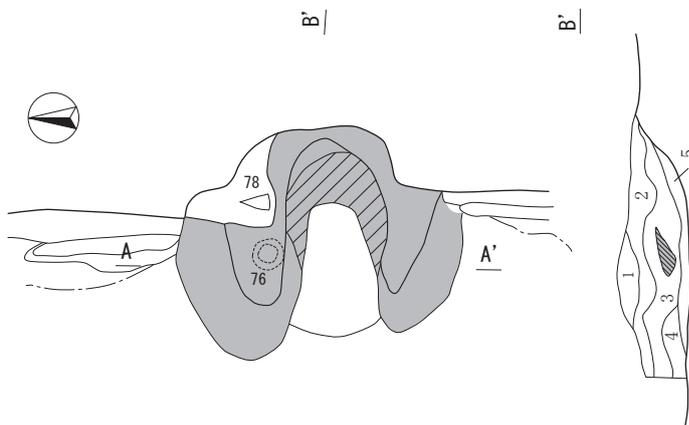
第9表 7号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 注記
			口径	底径	器高							
76	SI07	須恵器・坏	14.0	10.0	3.8	底部回転ヘラケズリ，中央部一部ナデ，ヘラ記号「カ」カ，「十」カ	ほぼ完形	長石，石英， 海綿骨針	良好	にぶい黄：2.5Y6/3 灰黄：2.5YR6/2		No3
77	SI07	土師器・甕	(22.0)	—	—	口唇部摘み上げ	口縁部片	長石，石英，雲母	普通	にぶい黄褐色：10YR4/3		1区
78	SI07	土師器・甕	—	—	—	体部外面ヘラミガキ，内面ヘラナデ	体下半部片	長石，石英，雲母	良好	にぶい褐色：7.5YR5/4		No2



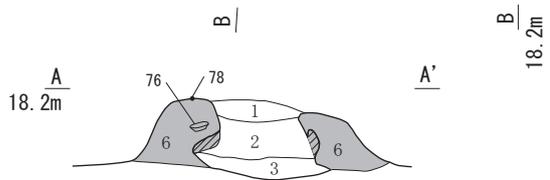
7号竪穴建物跡

- 1 黒色 7.5YR2/1 炭化物粒・酸化粒少量、非常に硬く締りあり、やや粘性あり
- 2 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒少量、締りあり、やや粘性あり
- 3 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒少～中量、締りあり、やや粘性あり
- 4 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒多量、わずかに軟らかい、粘性なし
- 5 褐色 7.5YR4/3 ローム主体、明黄褐色ローム小ブロック少量、やや軟らかい、粘性弱い
- 6 暗褐色 7.5YR3/3 ローム粒多量、ローム小ブロック少量、炭化物粒少量、締りあり、粘性なし
- 7 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒少量、締りあり、粘性なし
- 8 黒色 7.5YR2/1 ロームブロック少量、締りあり、粘性弱い
- 9 暗褐色 7.5YR3/3 ローム小ブロック中量、軟らかい 粘性なし
- 10 にぶい褐色 7.5YR5/4 粘土小～大ブロック主体、締りあり、粘性あり
- 11 褐色 7.5YR4/4 明黄褐色ローム小～大ブロック多量、黒褐色土中ブロック少量、締りあり、やや粘性あり
- 12 褐色 7.5YR4/4 明黄褐色ローム主体、黒褐色土中ブロック少量、締りあり、やや粘性あり



7号竪穴建物跡 カマド

- 1 にぶい橙色 7.5YR6/4 粘土中・大ブロック多量、焼土小ブロック少量、締りあり、粘性あり
- 2 黒褐色 7.5YR3/2 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック少量、締りあり、粘性なし
- 3 にぶい赤褐色 5YR4/4 粘土中～大ブロック主体、焼土小ブロック少量、締りあり、粘性なし
- 4 暗褐色 7.5YR3/4 粘土大ブロック主体、焼土粒少量、締りあり、粘性あり
- 5 黒褐色 7.5YR3/2 炭化物粒を含む灰層、やや軟らかい、粘性なし
- 6 にぶい褐色 7.5YR6/3 粘土大ブロック主体、黒褐色鉄分粒少量、締りあり、粘性あり



第 25 図 7 号竪穴建物跡

8号竪穴建物跡（第26・27図，第10表，写真図版4・9）

位置 調査区北西部の調査区ラインを跨ぐ位置にあり，竪穴の西側大部分は調査区外にある。

規模と平面形 南北方向3.17 m，東西方向0.4 m以上。

主軸方向 N-22° -W

壁 壁は約40 cmの高さまで残存し，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 確認した範囲においては平坦でやや軟質であった。壁周溝は幅が10 cm前後，深さ8 cm前後で確認されている。竪穴建物跡の掘り方は，全体に深さ15～24 cmほどである。

覆土 この地点では現代の盛り土層の下に表土が堆積し，表土直下が遺構確認面で，1～3層が遺構覆土，4・5層が掘り方覆土となっている。遺構覆土は黒褐色土主体の自然堆積土層と見られる。

遺物 出土遺物は土師器の坏底部片が覆土から出土している。

9号竪穴建物跡（第30図，写真図版4）

位置 調査区東部の1号竪穴建物跡の北側の位置にあり，竪穴の大部分は北側の調査区外にある。

規模と平面形 南北方向1.16 m以上，東西方向1.74 m以上。

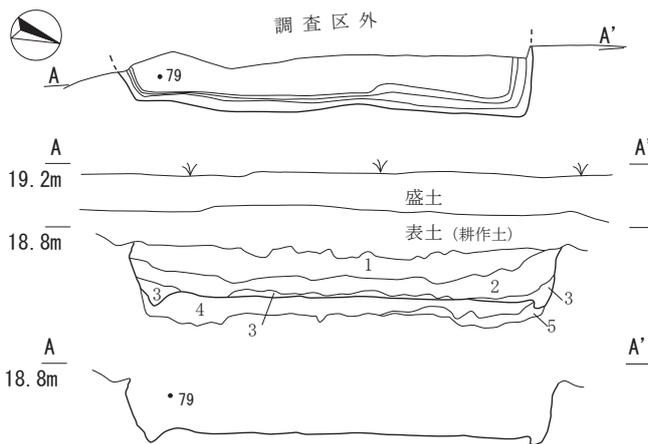
主軸方向 N-9° -W

壁 壁は約56 cmの高さまで残存し，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 確認した範囲においては平坦でやや硬化していた。壁周溝は幅が10 cm前後，深さ12 cm前後で確認されている。竪穴建物跡の掘り方は，全体に深さ15～40 cmほどである。

覆土 この地点では現代の盛り土層の下に表土が堆積し，表土直下が遺構確認面で，1～4層が遺構覆土，5・6層が掘り方覆土となっている。遺構覆土は暗褐色土主体であるが，2層はロームブロックを多量に含んだ埋め戻し堆積土層と見られる。

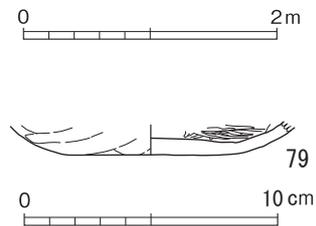
遺物 出土遺物は須恵器の坏が覆土から出土している。



第26図 8号竪穴建物跡

8号竪穴建物跡

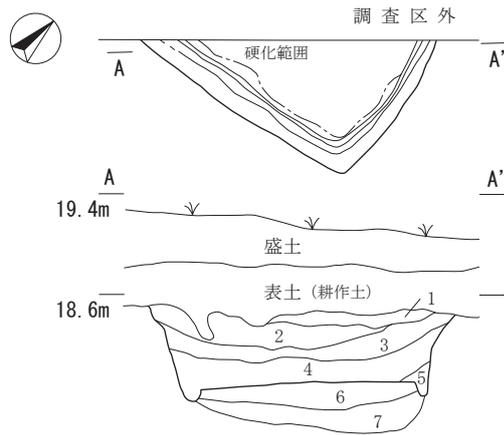
- 1 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒多量，ローム小ブロック少量，締りあり，粘性なし
- 2 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒少量，ロームブロック少量，締りあり
- 3 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒極少量，ローム小ブロック少量，締りあり
- 4 暗褐色 7.5YR3/3 ローム小～大ブロック多量，硬く締りあり，やや粘性あり
- 5 褐色 7.5YR4/4 ローム中ブロック主体，硬く締りあり，やや粘性あり



第27図 8号竪穴建物跡出土遺物

第10表 8号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	器高						
79	SI08	土師器・坏	-	6.5	-	底部外面ヘラナゲ，内面ミガキ	底部片	長石，石英	良好	にぶい黄褐色：10YR5/3	No1

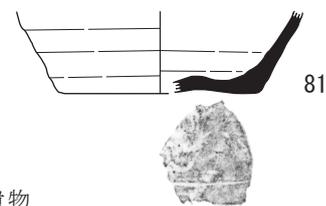
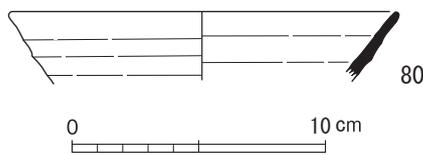


9号竪穴建物跡

- 1 暗褐色 7.5YR3/4 ローム粒少量、やや軟らかい、粘性なし
- 2 褐色 7.5YR4/2 ローム中～大ブロック多量、軟らかい、粘性なし
- 3 暗褐色 7.5YR3/4 ローム粒中量、軟らかい、粘性なし
- 4 暗褐色 7.5YR3/3 ローム粒多量、縮りあり、粘性なし
- 5 暗褐色 7.5YR3/3 ローム粒多量、軟らかい、粘性なし
- 6 暗褐色 7.5YR3/3 ローム小・中ブロック中量、しまりあり、粘性なし
- 7 褐色 7.5YR4/3 ローム小～大ブロック多量、縮りあり、やや粘性あり



第28図 9号竪穴建物跡



第29図 9号竪穴建物跡出土遺物

第11表 9号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考 注記
			口径	底径	器高						
80	SI09	須恵器・坏	(15.6)	—	—	—	口縁部片	長石、海綿骨針	良好	灰黄色：2.5Y6/2	SI10一括
81	SI09	須恵器・坏	—	(7.6)	—	底部回転ヘラ切り離し無調整、 底部ヘラ記号、ロクロ右回転	底部片	石英、チャート、 海綿骨針	普通	灰オリーブ色：5Y6/2	SI10一括

2 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第30図)

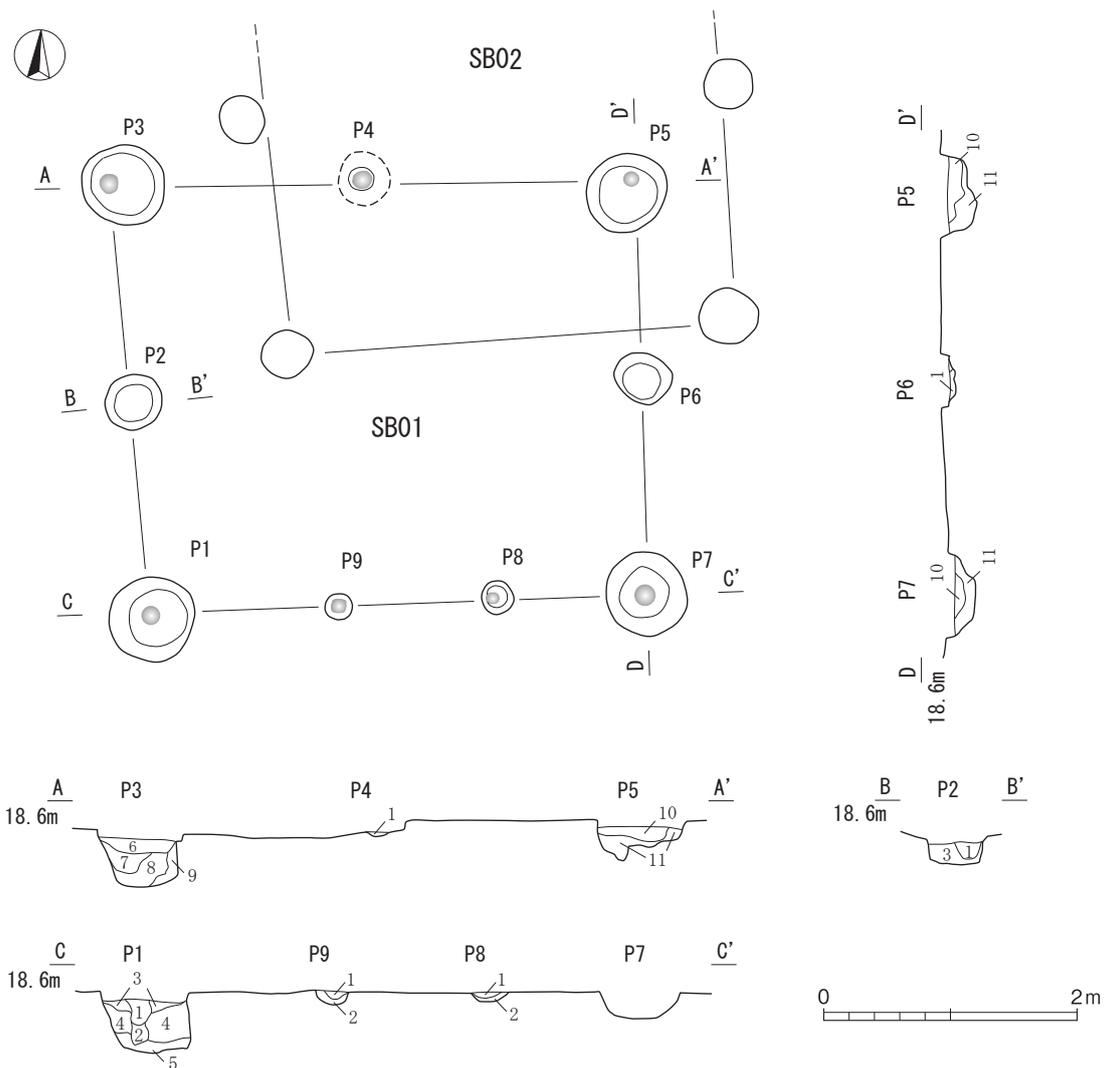
位置と重複関係 調査区西部にあり、2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模と平面形 南北方向は3.3～3.4m、東西方向は3.9～4.1m。東西方向に長い長方形。2×2間の側柱建物で、南面だけ3間である。南北方向の柱間はP2とP6の柱芯位置が不明であるが、掘り方位置からみて等間の1.6～1.7mと推定できる。東西方向の柱間は南列で西から1.48・1.2・1.2m、北列で2.0・2.1mである。面積は13.9㎡。

主軸方向 N—7°—W

柱穴 柱穴は9箇所である。P1・P3・P5・P7が四隅の柱で、直径が0.6～0.69mと大きく、深さは0.32～0.5mである。P2・P4・P6は四隅柱の間にある柱穴で、直径はひとまわり小さく0.43～0.46m、深さは0.11～0.27mとやや浅い。P8・P9は南面列間にあり、直径は0.2～0.26m、深さ0.08～0.11mと小規模な柱穴である。P1は柱穴の据え付け痕が土層断面で明瞭に見られ、柱材の直径は約0.2mと推定される。その他の柱穴覆土は、土層断面観察から見て抜き取り後の再堆積層のようである。

遺物 遺物は出土していない。



1号掘立柱建物跡

- | | | | |
|----------------|------------------------------------|-----------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 7.5YR3/1 | ローム粒少量, ローム中ブロック少量, やや締りあり, 粘性なし | 6 黒褐色 7.5YR3/2 | ローム粒多量, ローム小ブロック中量, 締りあり, 粘性なし |
| 2 黒褐色 7.5YR3/1 | ローム粒少量, ローム中ブロック少量, やや軟らかい, やや粘性あり | 7 黒褐色 7.5YR3/1 | ローム粒少量, ローム小ブロック少量, やや締りあり, やや粘性あり |
| 3 黒褐色 7.5YR3/2 | ローム粒多量, ローム中ブロック多量, 締りあり, 粘性なし | 8 黒褐色 7.5YR3/1 | ローム粒多量, ローム小ブロック多量, やや軟らかい, 粘性なし |
| 4 黒褐色 7.5YR3/2 | ローム粒多量, ローム中ブロック多量, 締りあり, 粘性なし | 9 黒褐色 7.5YR3/2 | ローム粒多量, ローム小ブロック中量, やや締りあり, 粘性なし |
| 5 黒褐色 7.5YR3/1 | ローム粒少量, ローム中ブロック少量, 締りあり, やや粘性あり | 10 黒褐色 7.5YR3/1 | 炭化物粒少量, ローム小ブロック少量, やや軟らかい, 粘性弱い |
| | | 11 褐色 7.5YR4/3 | ローム小〜中ブロック主体, ややしまりあり, 粘性あり |

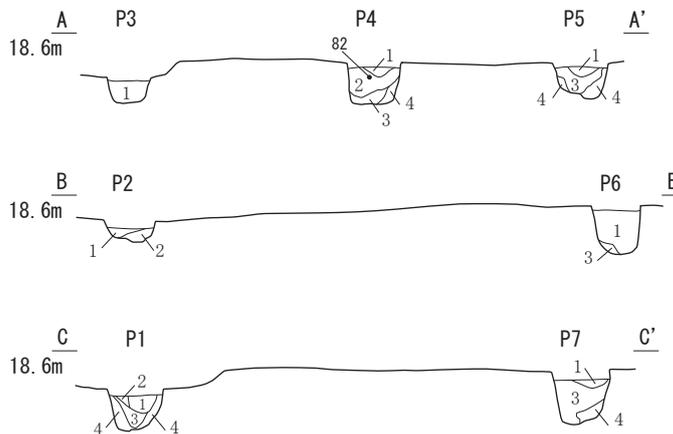
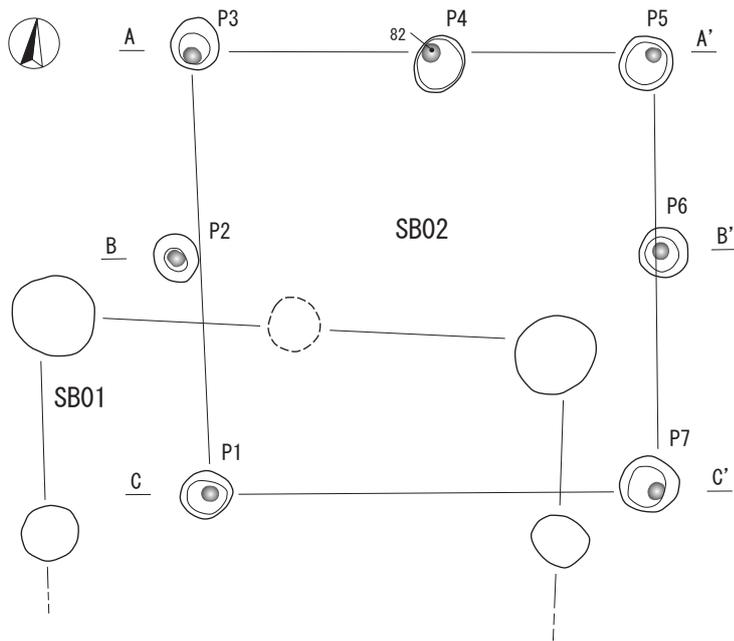
第30図 1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡 (第31・32図, 第12表, 写真図版4・9)

位置と重複関係 調査区西部にあり, 1号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模と平面形 南北方向は3.4～3.5m, 東西方向は3.5～3.65m。平面形がほぼ正方形の2×2間の側柱建物である。南面だけは間柱が見られず, 1間である。南北方向の柱間は, 西面側が南から1.8・1.6m, 東面側が1.9・1.6mである。東西方向の柱間は北列が西から1.9・1.75m, 南列は3.5mである。面積は12.8㎡。

主軸方向 N—8°—W



2号掘立柱建物跡

- 1 黒色 7.5YR3/1 ローム粒少量, 締りあり, 粘性なし
- 2 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒少量, ローム小ブロック少量, 締りあり, 粘性なし
- 3 暗褐色 7.5YR3/4 ローム粒多量, ローム小ブロック多量, 軟らかい, やや粘性あり
- 4 褐色 7.5Y4/3 ローム小・中ブロック主体, やや軟らかい, やや粘性あり



第31図 2号掘立柱建物跡



82



第32図 2号掘立柱建物跡出土遺物

第12表 2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考 注記
			口径	底径	器高						
82	SB02	須恵器・高台付坏	-	9.2	-	-	底部片	長石, 海綿骨針	普通	黄灰色: 2.5Y4/1	No1

柱穴 柱穴は7箇所各柱穴とも直径が0.39～0.47mで、深さが0.28～0.43mとほぼ同じ規模のものである。P1の土層断面は柱の据え付け位置が推測できるような堆積状況である。その他のピットの柱据え付け位置は底面の観察から柱位置を推定したものである。

遺物 出土遺物は, 82の須恵器高台付坏の高台部片がP4の柱抜き取り後の堆積土層中から出土している。

3 その他の遺構

1号不明遺構（第33・34図，第13表，写真図版4・9）

位置 調査区南西部にあり，遺構の半分程度は南側の調査区外にあるものと見られる。

規模と平面形 南北方向の幅は1.90 m，東西方向の長さは4.72 m以上。現状では隅丸長方形と推測される。南北の壁際には間隔をあけてピットが対に配列されている。

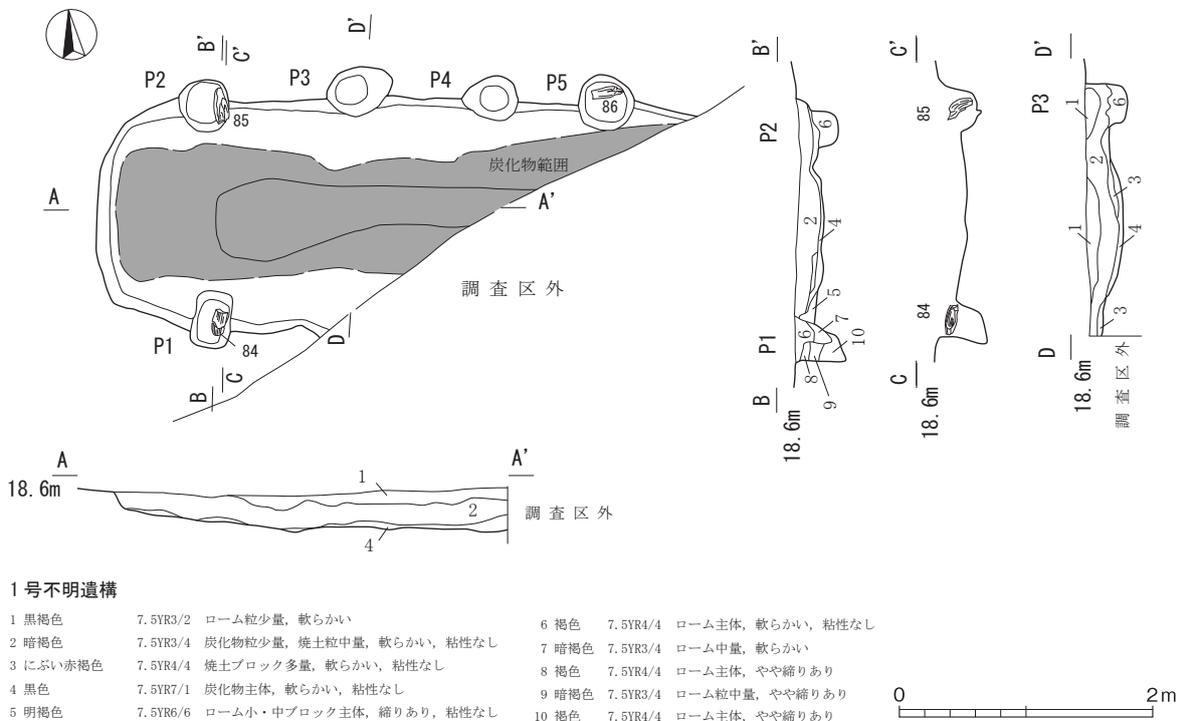
主軸方向 N-84°-W

底面 緩やかな船底状で，長軸方向の西端の壁際と東の最深部の高低差は約15cm，短軸方向南北壁際と中央部の高低差も約15cmである。底面は全体に被熱して焼土化している。

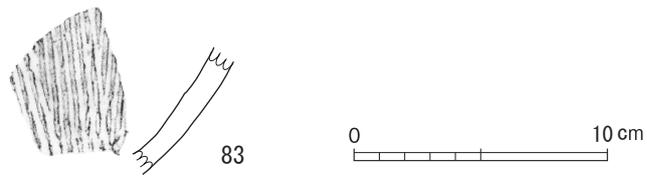
ピット 壁際で確認されたピットは南壁側でP1，北壁側でP2からP5である。P1とP2は対をなし，間隔は1.8 m。P2とP3間は1.2 m，P3とP4間は1.1 m，P4とP5間は0.9 mで，P1・P2・P5の覆土には木杭片が残存していた。

覆土 遺構覆土は暗褐色の自然堆積土層と見られる土で埋没しており，その下には底面に沿って厚さ3～4 cmで木炭片と炭化物層が堆積している。

遺物 出土遺物は83の陶器の播鉢が覆土から，84～86の木杭（写真図版9）はそれぞれピットからの出土で，84・86は横になった状態で，85は立った状態で出土している。



第33図 1号不明遺構



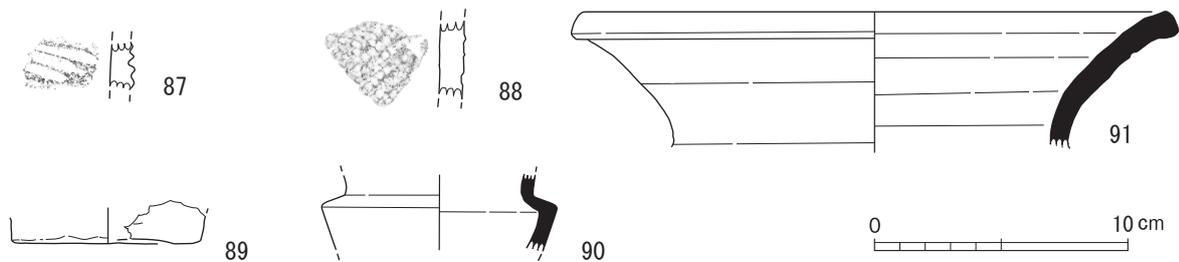
第 34 図 1 号不明遺構出土遺物

第 13 表 1 号不明遺構出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考記
			口径	底径	器高						
83	SX01	陶器・播鉢	—	—	—	—	体部片	石英	良好	にぶい赤褐色：2.5YR4/3	SI9 一括
84	SX01	木杭 1	長さ [32.5]	直径 8.2	重量 775g	自然木の幹を利用し、一方の下端を尖らせる加工を施す					P1
85	SX01	木杭 2	長さ [26.0]	直径 7.0	重量 575g	自然木の枝を利用し、一方の下端を尖らせる加工を施す					P2
86	SX01	木杭 3	長さ [26.0]	直径 6.7	重量 570g	自然木の幹を利用し、一方の下端を尖らせる加工を施す					P5

遺構外出土遺物 (第 35 図, 第 14 表, 写真図版 9)

遺構に伴わない遺物として、縄文土器 3 点、須恵器 2 点を掲載した。87 の縄文土器体部片は磨滅が激しいが縄文施文の胴部片である。88 は単節 RL を施文する縄文時代中期後半の胴部片である。89 は縄文土器底部片と思われる。90 は須恵器小型短頸壺で 8 世紀後半頃。91 は須恵器甕口縁部で 9 世紀代のものであろうか。



第 35 図 遺構外出土遺物

第 14 表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量 (cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考記
			口径	底径	器高						
87	遺構外	縄文土器	—	—	—	単節縄文	体部片	微砂粒多量	普通	にぶい褐色：7.5YR5/3	SI01 4区 一括
88	遺構外	縄文土器	—	—	—	単節 RL 縄文	体部片	微砂粒多量		にぶい橙色：7.5YR6/4	SI01 1区 一括
89	遺構外	縄文土器・深鉢	—	(7.4)	—	—	底部片	微砂粒	良好	にぶい橙色：7.5YR6/4	SI04 一括
90	遺構外	須恵器・小型短頸壺	—	—	—	—	口縁部片	長石	普通	暗灰色：7.5YR5/1	攪乱
91	遺構外	須恵器・甕	(24.0)	—	—	—	口縁部片	長石, 石英	良好	灰色：N6/	SX01

V 総括

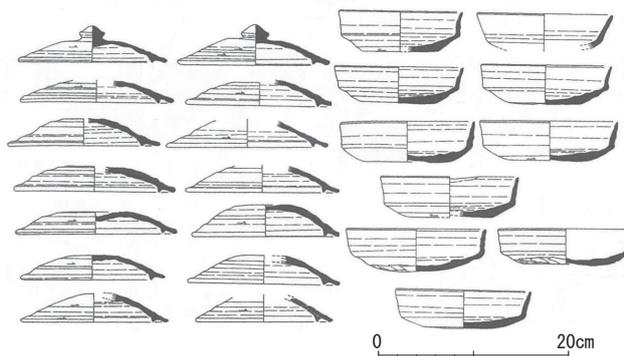
本遺跡からは7世紀末～9世紀代の竪穴建物跡9棟と掘立柱建物跡2棟、時期不明な遺構1が確認された。調査面積621㎡余りという限られた範囲の調査のため、集落の全体像は見ることはできないが、特徴のある遺構や遺物が見られるので、時期別に全体を眺め総括としたい。

7世紀後半代の遺構と遺物

7世紀代の遺構は3号竪穴建物跡1棟だけである。3号は南北方向に長い小型の建物跡で支柱穴も出入りロピットもない。カマド本体は壁をほとんど掘り込まず、屋内におけるカマドの占有率が大きい建物跡である。

この3号竪穴建物跡からは、特徴のある須恵器（第15図44）が出土している。本遺跡では、この1例しかないもので、器形は古墳時代の合子形坏蓋に似ているが、天井部としては余りに平坦な仕上げであるため無台の坏と考えられる。本遺跡が所在する水戸市内には木葉下^{あぼっけ}窯跡群があり、本遺跡内から出土する須恵器の多くは同窯跡群のものと考えられる。須恵器44も胎土中に海綿骨針、チャート礫を含んでいて、木葉下窯跡群の胎土の特徴と一致するが、現状ではこの形状のものは同窯跡から見つからない。ただし、消費遺跡である台渡廃寺跡（第26次）T4-005号遺構出土3の坏や、同T5-001号遺構出土の15の坏等に、小振りだが類似した形態・

技法で同時期の坏が見られる。近隣では、本遺跡から約40km離れた新治^{にいほり}窯跡群（土浦市北部からつくば市）があり、本遺跡でもここの製品が数点見ついている。新治窯跡群の製品には胎土に雲母が含まれるのだが、本例には入っていないので同窯跡群産には該当しない。そこで、隣県の窯跡資料を探すと、この坏の形状に最も類似し、しかも胎土に海綿骨針を含む製品が福島県相馬市の善光寺2B号窯出土品にある



第36図 善光寺2B窯跡出土遺物

（第36図）。善光寺2B号窯の製品は、口径がやや大きなかえり蓋を伴っており、これに組み合う無台坏身として生産されていると考えられている。本遺跡の須恵器44が善光寺窯の製品であれば、約200kmの距離を運ばれたことになる。現時点では水戸市木葉下窯跡群内の未確認の窯跡か、福島県相馬市善光寺窯跡の製品である可能性が考えられるとしておきたい。

8世紀代の遺構と遺物

8世紀代の遺物を出土している6・7・8号竪穴建物はいずれもやや小型な建物である。6号竪穴建物から出土している須恵器坏（第23図75）は二次底部面を持つ底部回転ヘラケズリの坏で、木葉下産須恵器坏A分類の2類（佐々木1995）で8世紀第2～3四半期のものと見られる。7号竪穴建物では、カマド袖部構築粘土中に8世紀前葉の完形の須恵器坏（第24図76）が埋め込まれていたため、その頃に造られたと考えられる。8号竪穴建物は8世紀前半代に多い底部ヘラケズリの土師器坏が覆土から出

土していることや主軸方向が6号堅穴の主軸方向に近いことなどから、8世紀前半代に機能していたものと考えられる。

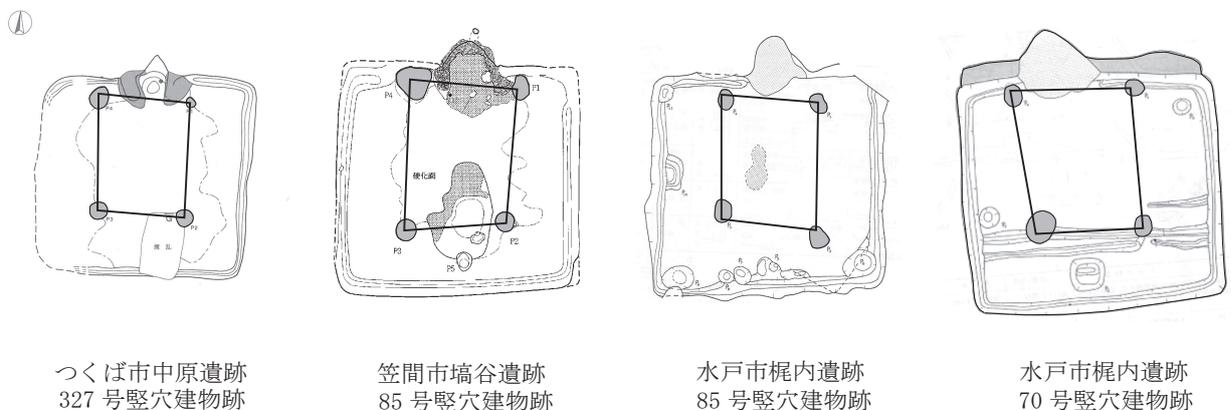
9世紀代の遺構と遺物

8世紀代に造られ、その後上屋の建て替えを行い、廃絶の時期は9世紀代になるとと思われるものが大型の1号堅穴建物跡である。出土遺物は8世紀第4四半期頃のものから9世紀第3四半期頃のものがある。最も新しい時期の遺物は、P7覆土から出土している須恵器坏片(第8図2)や南西部の覆土から出土している須恵器坏(同3)が9世紀の中頃の時期のもので、カマド内や床から破片で出土している新治産の須恵器甗(鉢)(第9図16)は小高村内段階から東城寺寄居前B段階(赤井1997)の9世紀前半頃、土師器甕類も9世紀前半頃を主体としている。よって、堅穴の廃絶の時期は9世紀中頃と考えられる。9世紀第3四半期頃の土師器甕が少量あるが、これらは埋没途上の廃棄遺物と思われる。

1号堅穴建物跡の時期と構造の関係にもふれておく。1号では、堅穴の平面相似形に並ぶ4本柱支柱穴配置から、4本中2本がカマド両脇の壁柱穴となる4本柱支柱穴への変遷が推定できる。まず、堅穴の平面相似形に並ぶ段階で柱の据え替えが確認でき、上屋の造り直しがあったものと見られる。またそれに対応するように、出入り口は8世紀第4四半期頃の須恵器坏(第8図1)を伴うP6からP1に造り替えられている。このことから、初期の1号堅穴建物跡は8世紀後半～後葉頃に堅穴の相似形に位置する4本柱支柱穴で、P6の出入り口ピットを伴う大型堅穴建物跡として機能し、一度上屋の造り直しをしていた。次の段階の支柱穴配置を推測すると、北壁のカマド両脇壁際に支柱穴と見ても遜色ない大きさのP7とP8がある。P7の覆土からは9世紀中頃の須恵器坏(第8図2)が出土しており、最も新しい段階の柱穴になると見られる。もしP7・8が支柱穴であるなら、2本がカマド両脇の壁柱穴となる4本柱支柱穴構造の堅穴建物跡で、P1が出入り口ピットとなる。この構造の堅穴建物跡は茨城県内に、つくば市中原遺跡327号、笠間市埜谷遺跡85号、水戸市梶内遺跡70・85号などの類例があり(第37図)、出土遺物は9世紀前半代から中頃のものが多く、このことから、2本がカマド両脇の壁柱穴構造の堅穴建物跡は9世紀前半代から中頃の大型堅穴建物跡に見られる特徴であると予察しておきたい。

9世紀代のその他の堅穴建物跡は2・4・5号である。いずれも小型で支柱穴がないが、この時代では主流の堅穴建物と考えられる。

2号堅穴建物跡の遺物は、古いものでは須恵器盤(第11図26)や蓋(同27)の破片で8世紀代、他



第37図 カマド両脇の壁柱穴と組み合う4本柱支柱穴構造の堅穴建物例

の須恵器の坏・土師器の甕などは9世紀前半代のものが主体で、体部から口縁部にかけてあまり屈曲せずに立ち上がる須恵器の甕は9世紀中葉～後半頃のものと思われる。土器の出土状況からみて、2号は9世紀前半代の竪穴建物跡と考えられる。2号竪穴建物跡のカマドでは立てられた状態の土製支脚が原位置のまま出土している。土製支脚の底面は全体に弱還元状態であるが、熱を受けた方向と見られる側面の2分の1強が酸化焰色である。このことから、土製支脚は下部を穴に埋め込んでいるわけではないものの、常に一定方向からの火を受けていたものと考えられる。おそらく土製支脚はカマドに埋め込まれたカマド甕と一体になる構造で、カマド天井部を支える構造材としての役割も併せもち、固定した状態で使用されたと見てよいと思われる。2号以外の8～9世紀の竪穴建物でも、カマド燃焼室内の堆積灰層の上面には、土製支脚設置痕と推定できる浅い窪みが確認できる例がある。本報告では、そのことについても注目して図中に示している（1・4・5号竪穴建物跡カマド）。

4号竪穴建物跡の遺物は、土師器の甕（第17図55）が9世紀前半代、須恵器の坏（同50）・盤（同52）は残存率は悪いが9世紀の第3四半期頃のものである。4号は9世紀前半から中葉頃に機能していたと見られる。5号竪穴建物跡の出土遺物については、重複する6号竪穴建物跡に由来する8世紀代の遺物を除いて、残存率がよい須恵器坏（第21図60）が新治産の9世紀第3四半期頃の遺物と見られる。

掘立柱建物跡2棟も9世紀代の建物である。2号掘立柱建物跡の掘り方内から出土している須恵器高台付坏の時期が、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期であり、土層の堆積状況から見て構築時の掘り方内混入ではなくて柱材抜き取り後の流れ込みと見られるが、どちらの場合でも9世紀第1四半期以降に廃絶したものと考えられる。1号掘立柱建物跡は遺物の出土がなく、重複する2号との前後関係は不明だが、1・2号とも主軸方向がほぼ揃っていることや、4・5号竪穴建物跡の主軸方向と近い事を考え合わせると、9世紀前半代に1・2号掘立柱建物跡は機能していたものと考えられる。

2棟の掘立柱建物跡は東・西・北面に間柱をもち、壁や屋根構造を支える2×2間の建物跡であるが、1号は南側の間柱だけが極端に細い3間であり、2号では南側の間柱がない構造である。どちらの建物



第38図 草堂の図
（『粉河寺縁起絵巻』の一部をトレース）

も南面を開放するような構造だとすれば、南面を正面として簡易な扉を設けるような施設ではないかと思われる。たとえば小さな草堂建物（第 38 図）のようなものが連想される。同時期の 5 号堅穴建物跡からは「宮」の墨書文字が出土しており、掘立柱建物跡との関係が注目される。

参考・引用文献

- 赤井博之 1997 「律令制変質期の須恵器の系譜」『東国の須恵器』古代生産史研究会
- 伊東重敏 1976 『大六天古墳（森戸古墳群第 12 号墳）』茨城県東茨城郡常澄村教育委員会
- 井上義安 1985 『水戸市下畑遺跡 市道酒門 8 号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 1994 『水戸市大串遺跡 市道常澄 8-1495 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 1998 『伊豆屋敷跡確認調査報告書 墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸地方埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996 『水戸市大串遺跡 常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市北屋敷古墳 市道常澄 7-0057 号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・木本挙周・渥美賢吾・関口慶久・株式会社京都科学 2008 『大串遺跡（第 7 地点）一介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 樫村宣行 1995 『一般国道 6 号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 梶内遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 100 集 財団法人茨城県教育財団
- 梶山雅彦 1993 『一般国道 6 号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 中ノ割遺跡・小山遺跡・諏訪前遺跡・高原古墳群・沢幡遺跡・高原遺跡・北屋敷遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第 27 号 婆良岐考古同人会
- 2008 「水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第 30 号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦・色川順子・渥美賢吾・片平雅俊 2008 『元石川大谷原遺跡一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会・元石川大谷原遺跡発掘調査会
- 川口武彦・小川和博・大淵淳志 2002 『水戸市元石川町所在 小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 合田芳正 1998 『古代の鍵』考古学ライブラリー 66 ニューサイエンス社
- 佐々木義則 1995 「木葉下窯跡群産杯 A の変化について」『婆良岐考古』第 17 号 婆良岐考古同人会
- 佐々木義則 2013 「木葉下窯跡産須恵器有台杯・有台杯蓋・有台盤の編年」『婆良岐考古』第 35 号 婆良岐考古同人会
- 鈴木敏則 2000 「湖西窯 古墳時代」『須恵器生産の出現から消滅 第 2 分冊 生産地編』東海土器研究会
- 高橋清文 2011 『埜谷遺跡 2』笠間市教育委員会
- 東京国立博物館 1980 『東京国立博物館図版目録（古墳・関東篇 1）』
- 中山信名 1979 『新編常陸国誌』宮崎報恩会
- 白田正子 2001 『中原遺跡 3』茨城県教育財団文化財調査報告第 170 集 財団法人茨城県教育財団
- 日沖剛史・石丸 敦・川口武彦・色川順子・新垣清貴・渥美賢吾 2008 『薄内遺跡（第 1 地点）移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 常陸古代窯業史研究会 1998 「水戸市山田窯跡群確認調査報告」『茨城県考古学協会誌』第 10 号
- 水戸市教育委員会 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成 10 年度版）』
- 水戸市教育委員会 2007 『平成 17 年度水戸市市内遺跡発掘調査報告書』
- 水戸市教育委員会 2010 『水戸の指定文化財』
- 南田法正・山本千春・土井道昭・渥美賢吾 2009 『町付遺跡（第 1 地点）集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 谷仲俊雄 2014 『宮部遺跡』石岡市教育委員会
- 吉川明宏 1991 「常澄村森戸出土の人物埴輪片」『年報』10 財団法人茨城県教育財団

写真図版



調査区全景（南西から）



1号竪穴建物跡（南から）



1号竪穴建物跡北西部覆土堆積状況（南から）

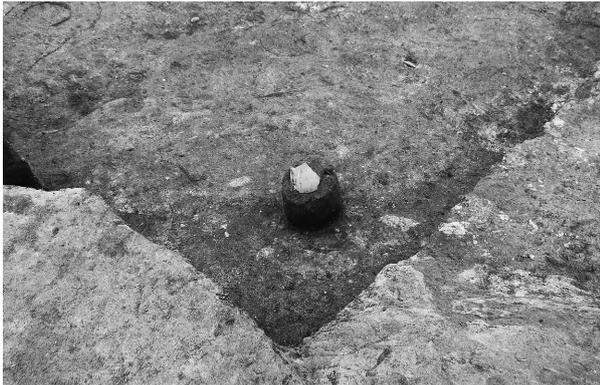


1号竪穴建物跡カマド（南から）



1号竪穴建物跡カマド左袖断割状況（南から）

写真図版 2



1号竪穴建物跡遺物出土状況（北西から）



1号竪穴建物跡鉄製品出土状況（北西から）



1号竪穴建物跡掘り方（南東から）



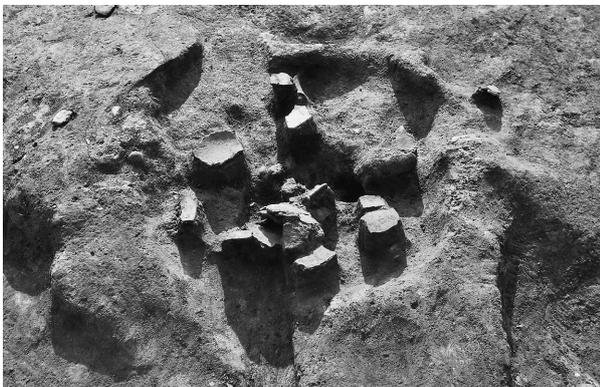
2号竪穴建物跡（南から）



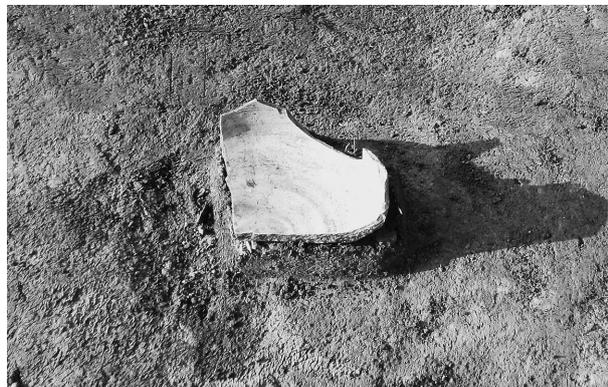
2号竪穴建物跡カマド（南から）



3号竪穴建物跡（西から）



3号竪穴建物跡カマド遺物出土状況（西から）



3号竪穴建物跡須恵器坏出土状況（南から）



4号竪穴建物跡（南から）



4号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）



4号竪穴建物跡カマド袖部断ち割り状況（南から）



4号竪穴建物跡古いカマド火床（南から）



5・6号竪穴建物跡（南から）



5号竪穴建物跡遺物出土状況（北から）



5・6号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）



6号竪穴建物跡遺物出土状況（北から）

写真図版 4



7号竪穴建物跡（東から）



7号竪穴カマド遺物出土状況（西から）



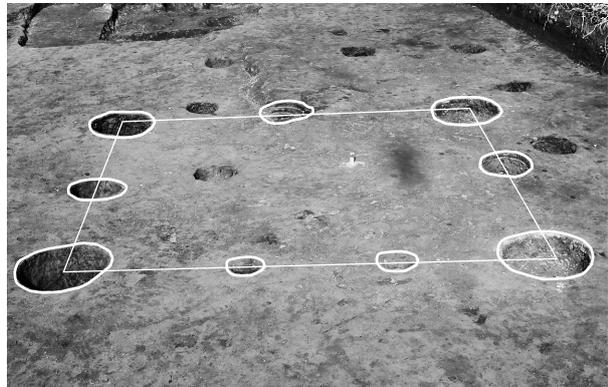
7号竪穴カマド袖断ち割り状況（西から）



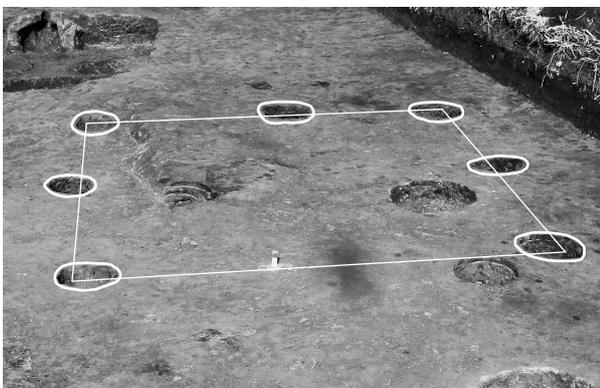
8号竪穴建物跡（東から）



9号竪穴建物跡（西から）



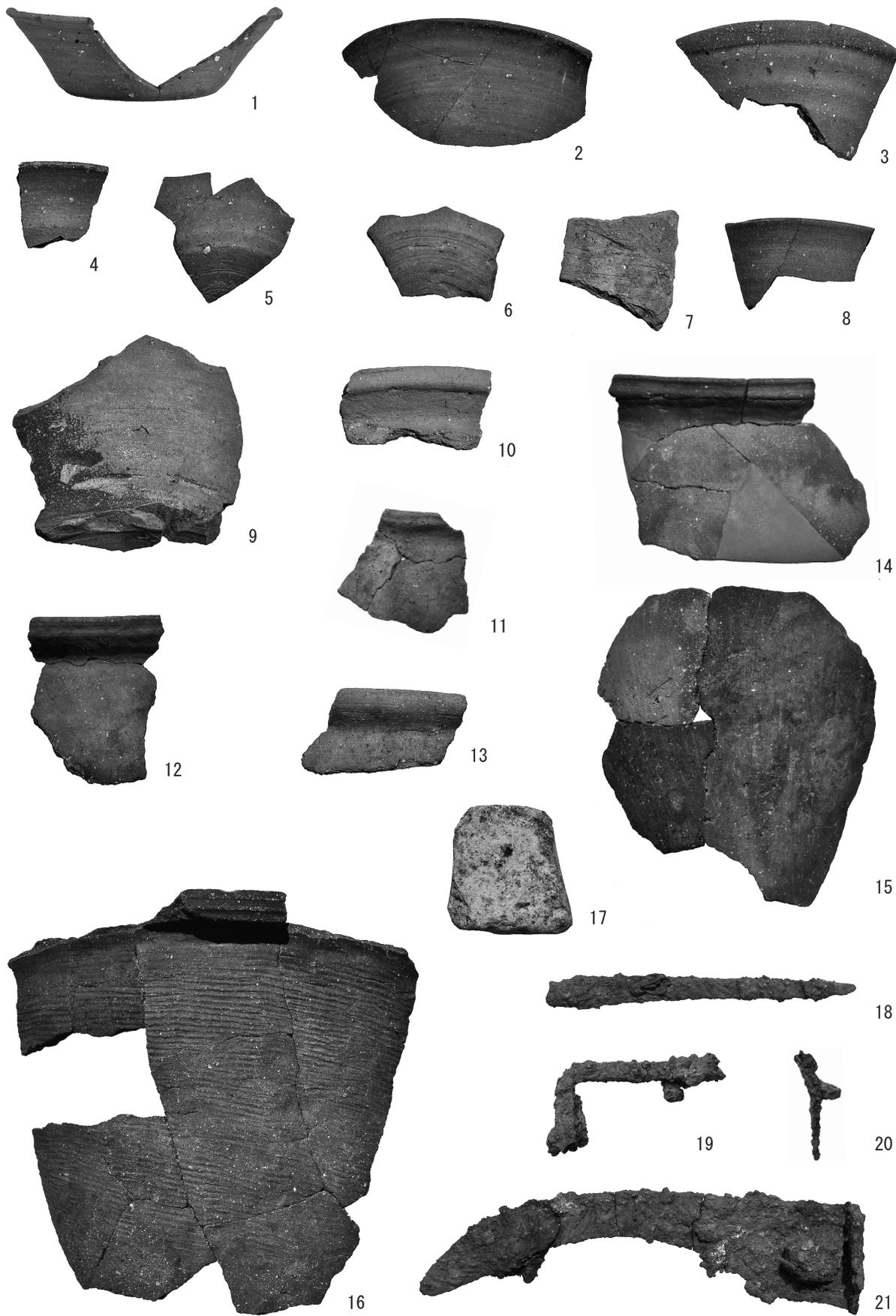
1号掘立柱建物跡（南から）



2号掘立柱建物跡（南から）

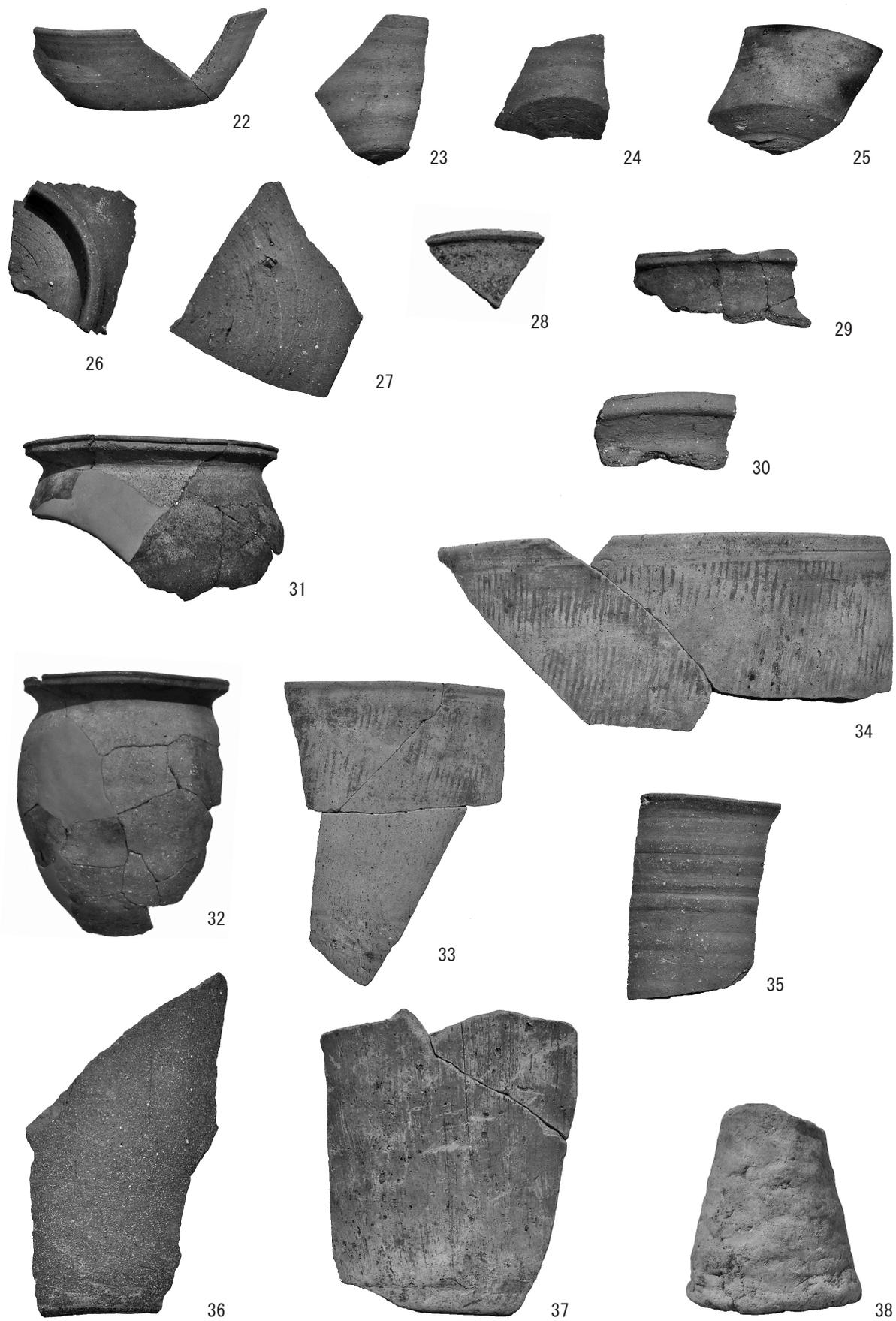


1号不明遺構（西から）

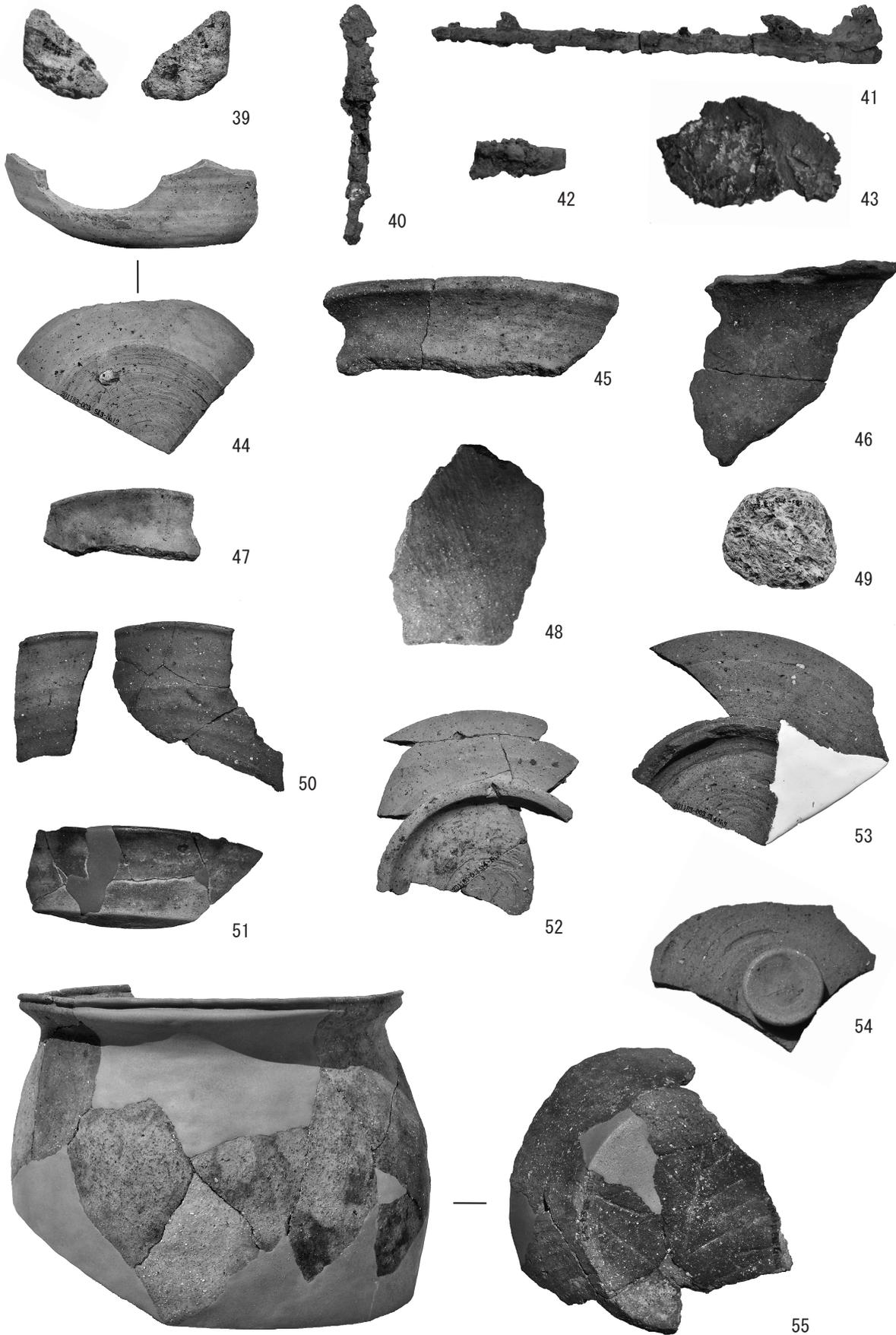


1号竖穴建物跡出土遺物 1-21

写真图版 6



2号竖穴建物跡出土遺物 22-38

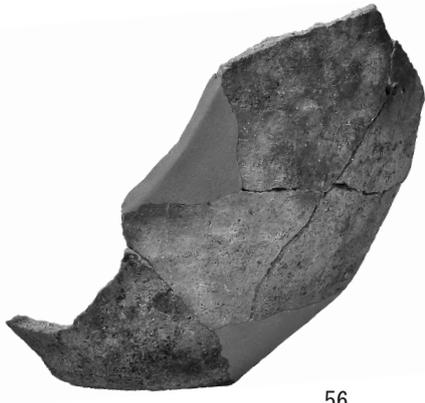


2号竖穴建物跡出土遺物 39-43

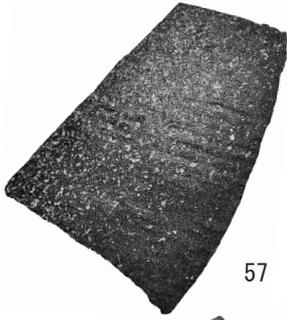
3号竖穴建物跡出土遺物 44-49

4号竖穴建物跡出土遺物 50-55

写真图版 8



56



57



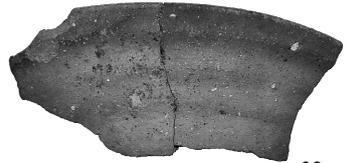
58



59



57



62



60



63



66



61



64



67



65



70



68



69



71



72

4号竖穴建物跡出土遺物 56-58

5号竖穴建物跡出土遺物 59-72



73



74



75



76



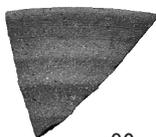
77



79



78



80



81



83



82



84



85



86



87



88



89



90



91

5・6・7・8・9号竖穴建物跡出土遺物 73-81 2号掘立柱建物跡出土遺物 82
1号不明遺構出土遺物 83, 84-86(縮尺 1/4) 遺構外出土遺物 87-91

報告書抄録

ふりがな	こはらいせき だいさんちてん							
書名	小原遺跡 第3地点							
副書名	都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第68集							
編集者名	賀来孝代							
著者名	太田有里乃, 染井千佳, 土生朗治							
編集機関	水戸市教育委員会事務局 文化課埋蔵文化財センター, 有限会社 毛野考古学研究所 茨城支所							
所在地	茨城県水戸市塩崎町 1064-1, 茨城県常総市菅生町 2042-1							
発行年月日	平成27年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こはら 小原遺跡	みとしとうまえちょう 水戸市東前町 1056～1065番地外 (7-6-1 東前原線)	08201	183	36° 20' 14"	140° 31' 37"	2015.1.26 ～ 2015.2.27	621.25 m ²	道路改良及び 流域関連下水 道工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小原遺跡	集 落 跡	奈良平安	竪穴建物跡 9 掘立柱建物跡 2		土師器 須恵器 土製品 鉄製品		奈良・平安時代の集落跡 で、平安時代に小型の掘 立柱建物跡が伴っている。 クルル鉤とみられる破断 片が出土している。	
		その他	不明遺構 1		陶磁器 木杭			

茨城県水戸市

小原遺跡（第3地点）

都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷 平成27年3月30日

発行 平成27年3月31日

編集 有限会社毛野考古学研究所
〒303-0044 茨城県常総市菅生町2042番地1
TEL 0297 (27) 0722

発行 水戸市教育委員会
〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064番地1
TEL 029 (269) 5090

印刷 朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地
TEL 027 (251) 1212